ISSN 0918-9904

経塚中世墓発掘調査報告

研究紀要　第19－2号

2010（平成22）年3月
三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、北伊勢地区広域営農団地基幹農道事業に伴い、昭和48年度に実施した経塚中世墓の発掘調査結果を再整理し、まとめたものである。

2．調査の体制等は下記による。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県教育委員会文化課

技師　谷本鋭次　　主事　吉村利男

調査場所　　いなべ市（旧員弁郡）大安町石榑下字経塚

調査期間　　昭和48年４月～７月

調査協力　　旧大安町教育委員会・三里小学校

3．本書の作成・執筆は、谷本鋭次が行った。

4．経塚中世墓は、以前「大安中世墓」と呼称されたが、今回「経塚中世墓」で統一した。

5．本書に用いた遺構表示略記号は下記による。

ＳＸ：墓

6．本報告の基となる記録図面類、写真および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管・管理している。

目　　次

Ⅰ　前　言 …… 1

Ⅱ　位置と地形 …… 1

Ⅲ　歴史的環境 …… 2

Ⅳ　丘陵頂上部の塚 …… 5

Ⅴ　尾根中央の土壙墓 …… 6

Ⅵ　中央墳墓群 …… 8

Ⅶ　南東部墳墓群 …… 15

Ⅷ　北部墳墓群 …… 20

Ⅸ　北方下段の土壙墓 …… 26

Ⅹ　斜面下方の火葬跡 …… 27

Ⅺ　その他遺物 …… 29

Ⅻ　結　語 …… 30

挿　図　目　次

第１図　経塚中世墓位置図 …… 2
第２図　北勢地域の中世墓 …… 2
第３図　経塚中世墓配置図 …… 4
第４図　ＳＸ１ …… 5
第５図　ＳＸ１出土遺物 …… 6
第６図　ＳＸ２ …… 7
第７図　ＳＸ２出土遺物 …… 7
第８図　ＳＸ３，４ …… 8
第９図　ＳＸ３，４出土遺物 …… 9
第10図　ＳＸ５，６，７，８ …… 10
第11図　ＳＸ５出土遺物 …… 10
第12図　ＳＸ６出土遺物 …… 11
第13図　ＳＸ７，８，10出土遺物 …… 12
第14図　ＳＸ８，９，10，11，12 …… 13
第15図　ＳＸ11，12出土遺物 …… 14
第16図　ＳＸ13，14，15 …… 15
第17図　ＳＸ16，17，18 …… 16
第18図　ＳＸ18，19出土遺物 …… 16
第19図　ＳＸ20出土遺物 …… 17
第20図　ＳＸ19，20，21，22，23，24 …… 18
第21図　ＳＸ23出土遺物 …… 19
第22図　ＳＸ25，出土遺物 …… 20
第23図　ＳＸ26出土遺物 …… 20
第24図　ＳＸ26，27，28 …… 21
第25図　ＳＸ27出土遺物 …… 21
第26図　ＳＸ28出土遺物 …… 22
第27図　ＳＸ29，30，31 …… 23
第28図　ＳＸ29出土遺物 …… 24
第29図　ＳＸ30出土遺物 …… 24
第30図　ＳＸ31出土遺物 …… 25
第31図　ＳＸ32，33，34，35 …… 25
第32図　ＳＸ36，37 …… 27
第33図　ＳＸ36出土遺物 …… 27
第34図　ＳＸ37，39出土遺物 …… 28
第35図　ＳＸ38，39，40，41 …… 28
第36図　ＳＸ42，43 …… 28
第37図　その他出土遺物 …… 29
第38図　その他出土遺物 …… 29

挿　表　目　次

第１表　北勢地域の中世墓 …… 3
第２表　中世墓一覧 …… 31

写　真　図　版　目　次

写真図版１　遺構 …… 33
写真図版２　遺構 …… 34
写真図版３　遺構 …… 35
写真図版４　遺物(石塔) …… 36
写真図版５　遺物(石塔) …… 37
写真図版６　遺物(石塔) …… 38
写真図版７　遺物(石塔) …… 39
写真図版８　遺物(土器) …… 40
写真図版９　遺物(土器) …… 41
写真図版10　遺物(土器) …… 42

Ⅰ　前　言

三重県いなべ市大安町石榑下字経塚に所在する「石榑下経塚」は、既に昭和36年に三重県教育委員会が実施した包蔵地調査によって知られていた周知の遺跡である（県遺跡旧番号－59）。この石榑下経塚が北伊勢地区広域営農団地基幹農道（ミルクロード）によって破壊されようとしているのを、県教育委員会が知ったのは昭和48年当初のことであった。

北伊勢地区広域営農団地基幹農道は、旧員弁郡藤原町から四日市市堂ケ山町までの山麓地帯を、南北に結ぶ基幹農道として計画されたものである。県農林水産部では工事計画に際しては、既刊の遺跡地図を参照したとのことであったが、遺跡地図は五万分の一の大縮尺であったうえに、現地を十分に確認しなかったことによって、このような事態になったのであった。

県教育委員会が現地を確認したところ、東に向かって延びる丘陵の頂上部には、径10m、高さ1.50m程度のマウンド一基と、段状に数段成形された斜面の各所に２m四方の土壇状のものがあり、その表面には河原石、山石が散乱している状態であった。頂上部のマウンドを「経塚古墳」、斜面の段状部分の墓を「経塚中世墓」と仮称することにした。

一方、この丘陵の南北両側は、既に相当工事が進んでおり、丘陵部分のみが未工事という状態で、道路計画は丘陵の頂上部付近を幅50m近くにわたってオープンカットする工法であった。県教育委員会は農林水産部に対し、遺跡の現状保存を申し入れるとともに、四日市耕地事務所とその取り扱いについて幾度となく協議が重ねられることになった。

しかし、遺跡の所在する丘陵のすぐ裾を流れる源太川には既に橋脚部分が出来上がっており、路線変更は不可能の状況であった。種々の協議の結果、早急に発掘調査を実施して記録保存をし、遺跡の破壊も止むを得ないということとなった。発掘調査は昭和48年４月に行うこととなり、文化庁にも連絡を取るとともに、県農林水産部に対して調査費用の負担を申し入れた。

発掘調査は４月９日から５月13日まで行った。更に、道路建設によって取り残された状態となる丘陵の東端部分が削平される予定であったため、この個所も７月に発掘調査を実施することになった。しかし、その間、工事担当者への連絡不徹底のためか、残念なことに発掘調査を実施する前に一部分が破壊されてしまった。

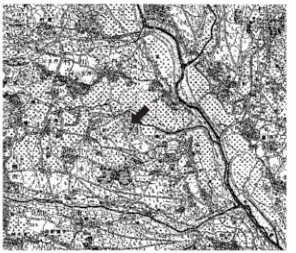
調査の結果、丘陵頂上部にあった経塚古墳と呼称していた塚は、斜面の中世墓と一連のものと考えられたために、古墳という名称をやめ、塚および斜面の墓を一括して「経塚中世墓」と呼ぶことにした。

Ⅱ　位置と地形

いなべ市大安町は三重県の北部に位置し、旧梅戸井村、三里村、丹生川村、石榑村からなる。鈴鹿山系の一つ竜ケ岳は標高1,095mを測る山系第３の高峰である。大安町はこの竜ケ岳より員弁川まで東西に広がる農山村である。鈴鹿山系からは北部伊勢平野を形成するいくつかの河川が流れ出している。中でも員弁川は三重県の最北端より員弁郡、桑名市の中央を貫流して伊勢湾に注いでいる大河川である。

そして、この員弁川の右岸には東西に流れる大小の支流が、扇状地を形成している。大安町にはいずれも竜ケ岳にその源を発する青川、源太川、宇賀川が流れている。その一つ、中央を流れる源太川は他の河川に比べてやや小さいが、石榑北山付近より、北垣内、石榑下の北側を流れ、三笠橋近くで員弁川に合流している。源太川はこの経塚中世墓の所在する丘陵のすぐ北側を東流し、左岸には緩い傾斜の扇状地がひらけており、その中央を三岐鉄道が南北に走っている。

経塚中世墓は源太川が員弁川に合流する個所より1,500m上流で、月岡部落の北側の東に延びる丘陵上に位置している。東と北側には広く水田が、員弁川までひらけている眺望の良い場所である。月岡部落



第１図　経塚中世墓位置図（1:75,000）
（1:50,000　桑名町　明治33　陸地測量部）

との間には小さな支谷が東から入り込んでいる。標高は頂上部で88.0m、すぐ北側の水田との比高は約15mである。北側は急崖となっており、古くに土砂崩れがあり、壺形土器が出土したとのことであった。

現況は山林で、小さな灌木が全面に覆っていたようであるが、調査着手時には既に伐採が終わっていた。表土は浅く10cm～15cmで地山となる。地山は黄褐色で、礫は含まない。頂上部の塚は径10m、高さ1.3mで周囲に幅1.5mの浅い周溝が巡っている。東に向かって下る斜面は、頂上の塚より10m近く下がった個所から数段の小さなテラスを造成して、礫を敷き並べた中世墓を造営している。

Ⅲ　歴史的環境

三重県いなべ市大安町は平成15年いなべ市として合併する前は員弁郡大安町で、その名の通り、古くは奈良時代に大安寺領であったことにその町名が由来する。大安寺伽藍縁起并流記資財帳に記される天武天皇２年の員弁郡宿野原伍佰町の四至南坂河は源太川に、天平16年阿刀野百町の四至東御井は石榑下、平塚、大井田の三井に比定されている（大安町教育委員会1986）。

当地域の考古学的発見の歴史は、三重県下では古く、野々田、照光寺遺跡等の縄文早期、前期の土器群が昭和30年代に紹介されている（岩野1956）。また最近では東海環状自動車道路建設等に伴う遺跡の発掘調査が多く手がけられており、縄文時代だけではなく当地域でこれまで不明だった弥生時代の様相も次第に明らかになりつつある。

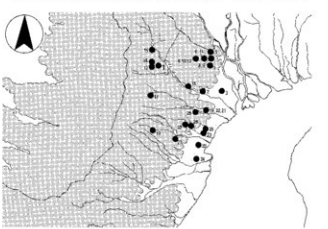
当該地域の歴史的環境については、これまでの権現坂遺跡等の調査報告書にすでに述べられているところであり（三重県埋蔵文化財センター2002）、ここでは、当地域の中世墓について概観してみたい。

四日市市より北の員弁川、内部川流域および掛樋川右岸流域には中世墓と考えられる遺跡は30個所近くがある（第２図、第１表）。

中世墓とされるように、鎌倉時代から室町期にかけての遺跡である。古瀬戸や常滑焼の蔵骨器と思われる陶器の出土、棺に用いたと思われる大型土器の出土、土壙内から副葬品と考えられる鏡、刀子、銭貨や土器の出土及び火葬した跡と考えられる土壙の検出等が中世墓とされる目安になっている。

旧桑名市内に２、旧多度町に９、旧大安町に３、旧藤原町に１、東員町に１、菰野町に２、四日市市に11個所、計29個所の遺跡が中世墓と考えられる。これらの中世墓とされる遺跡は大きくその立地により二つに大別される。

まず、経塚中世墓（１）のように丘陵斜面から古瀬戸や常滑等の蔵骨器と思われる土器が出土する遺跡である。桑名市笠坊谷墓址（２）、多度町愛宕中世墓群（４）、一ノ谷中近世墓群（５）、西天王平遺跡（９）、八壺谷古墓（10）、祢宜谷中世墓群（11）、猫ヶ谷遺跡（12）、藤原町東禅寺中世墓（15）、大安町丹生川上城跡（14）、菰野町杉谷中世墓（17）、梅ヶ谷墓跡（18）、四日市市伊坂中世墓跡（19）等である。杉谷中世墓や



第２図　北勢地域の中世墓

丹生川上城跡のように調査されたものもあるが、多くは遺構について不明なものが多い。

次に丘陵裾部分や台地平坦部で方形の土壙墓（石室墓）や火葬穴が発見される遺跡である。集落跡からの発見もある。多度町宮地中世墓群（6）、天王平遺跡（8）、東員町山田廃寺(16)、四日市市西ヶ広D遺跡(20)、上野遺跡(23)、羽津中学校中世墓地遺跡(25)、員野遺跡(28)、赤堀城跡(29)等である。

桑名市金ヶ谷中世墓（7）、大安町絹瀬古中世墓(13)、四日市市箱出遺跡(22)、ハカドラ中世墓遺跡(27)等は五輪塔や古瀬戸、常滑焼の蔵骨器と考えられる遺物の出土により中世墓とされているが、遺構については全く不明である。他にもこれまで中世墓とされてきた遺跡も少なからずあるが、伝承地であったり、塚があるのみであったり、五輪塔が建てられていたり、近世の墓であったりしたため、表にはあげていない。

No	遺　跡　名	所　在　地	立　地	遺　構	遺物（蔵骨器等）	文　献
1	経塚中世墓	いなべ市大安町石榑下	丘陵斜面(東)	土壙、火葬	古瀬戸、常滑、五輪塔	
2	笠坊谷墓址	桑名市中山町	丘陵斜面(東)	不明	古瀬戸、常滑	①
3	北別所中世墓	桑名市高塚町１丁目	台地端部(東)	不明	古瀬戸、常滑	①
4	愛宕中世墓群	桑名市多度町愛宕・柚井	丘陵斜面(南)	不明	古瀬戸、常滑、五輪塔、石仏	②
5	一ノ谷中近世墓群	桑名市多度町柚井字一の谷	丘陵斜面(東)	不明	常滑、五輪塔	②
6	宮地中世墓群	桑名市多度町多度字朝拝下	丘陵裾(南)	石室墓	土師器、山茶椀、青磁	②③
7	金ヶ谷中世墓	桑名市多度町御衣野字金ヶ谷	台地端(北)	不明	山茶椀、常滑	②
8	天王平遺跡	桑名市多度町小山字天王平	丘陵裾(東)	土壙、火葬	灰釉陶・壺	②
9	西天王平遺跡	桑名市多度町小山字西天王平	丘陵斜面(東)	石蓋土壙	須恵器横瓶	②
10	八壺谷古墓	桑名市多度町多度字八壺谷	墳丘斜面(南)	土壙	須恵器壺	②
11	祢宜谷中世墓群	桑名市多度町字祢宜谷	丘陵斜面(北)	不明	古瀬戸、常滑、五輪塔	②
12	猫ヶ谷遺跡	桑名市多度町字猫ヶ谷	丘陵斜面(南)	不明	常滑	②
13	絹瀬古中世墓	いなべ市大安町石榑北	丘陵斜面(東)	不明	五輪塔、石仏	④
14	丹生川上城跡	いなべ市大安町丹生川上	丘陵斜面(東)	方形、石組土壙	古瀬戸、常滑	⑤⑥
15	東禅寺中世墓	いなべ市藤原町東禅寺	丘陵斜面(東)	不明	古瀬戸、常滑	⑦
16	山田廃寺	員弁郡東員町山田字鍋撮	台地上	火葬穴	土師器皿	⑧
17	杉谷中世墓	三重郡菰野町杉谷	丘陵斜面(東)	火葬穴	古瀬戸、常滑、五輪塔ほか	⑨⑩
18	梅ヶ谷墓跡	三重郡菰野町宿野字梅ヶ谷	丘陵斜面(東)	不明	古瀬戸	⑪
19	伊坂中世墓跡	四日市市伊坂町	丘陵斜面(東)	不明	古瀬戸、常滑、五輪塔	④⑫
20	西ヶ広D遺跡	四日市市伊坂町松山	台地平坦部	方形土壙	山茶椀、山皿	④⑬
21	菟上遺跡	四日市市伊坂町	丘陵斜面(西)	火葬土壙	土師器皿、釘、銭貨	⑭
22	箱出遺跡	四日市市西坂部町箱出	台地平坦部	不明	蔵骨器、五輪塔	④⑫
23	上野遺跡	四日市市西阿倉川字上野	台地平坦部	方形土壙	羽釜、山茶椀	④⑫
24	川尻中世墓	四日市市川尻町	台地平坦部	不明	山茶椀、土師器	④⑫
25	羽津中学校中世墓地遺跡	四日市市羽津	丘陵裾	不明	古瀬戸、常滑、五輪塔	④⑫
26	樋尻谷中世墓遺跡	四日市市中村町	台地平坦部	不明	須恵器	④⑫
27	ハカドラ中世墓遺跡	四日市市山島町	台地平坦部	不明	古瀬戸、常滑、五輪塔	④⑫
28	員野遺跡	四日市市東坂部町	台地平坦部	火葬穴		⑯
29	赤堀城跡	四日市市城東町	台地平坦部	火葬穴		⑰

文献等

① 桑名市教育委員会『桑名市遺跡分布地図』1995

② 多度町教育委員会『多度町史資料編』2002

③ 三重県教育委員会『宮地中世墓発掘調査報告』1997

④ 三重県遺跡台帳

⑤ 三重県教育委員会『丹生川上城跡発掘調査報告』1985

⑥ 杉谷政樹 '55 丹生川上城跡」『三重県史資料編考古２』2008

⑦ 松本覚「東禅寺廃寺出土土器の紹介」『ふるさとの心をたずねて』第16輯 藤原町教育委員会 1996

⑧ 三重県教育委員会『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1981

⑨ 古江信「三重郡菰野町杉谷中世墓出土の陶器」『陶説』144 1965

⑩ 神田薫「'57 杉谷中世墓」『三重県史資料編考古２』2008

⑪ 菰野町教育委員会『菰野町遺跡地図』1990

⑫ 四日市市教育委員会『四日市市遺跡地図改訂版』1994

⑬ 四日市市教育委員会『西ヶ広遺跡発掘調査報告D地区』1972

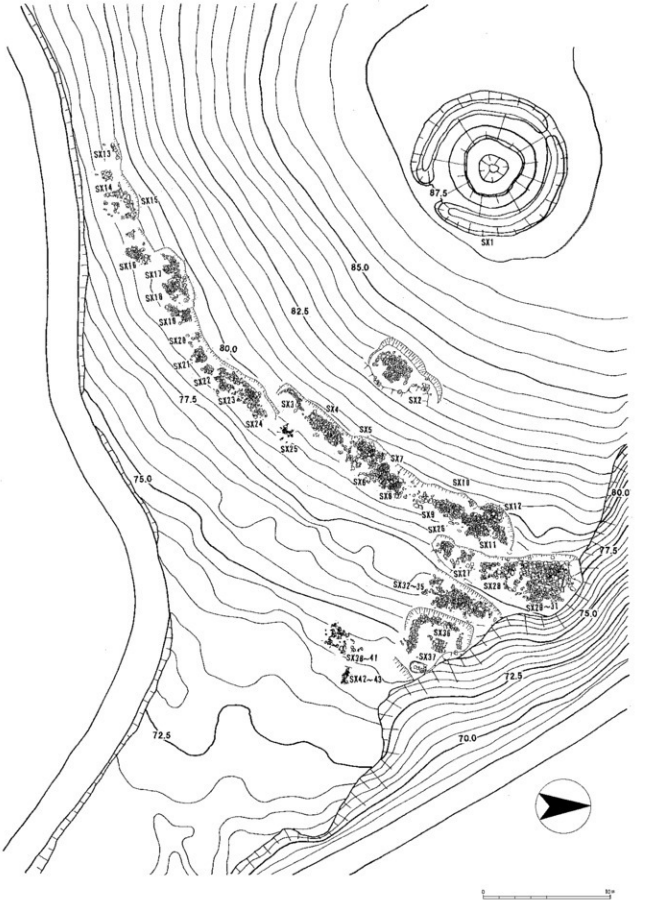
⑭ 三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』2005

⑮ 四日市市教育委員会『上野遺跡宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1992

⑯ 四日市市教育委員会『員野遺跡―古代集落址の調査報告―』1969

⑰ 四日市市教育委員会『赤堀城跡２　開発計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』1985

第１表　北勢地域の中世墓



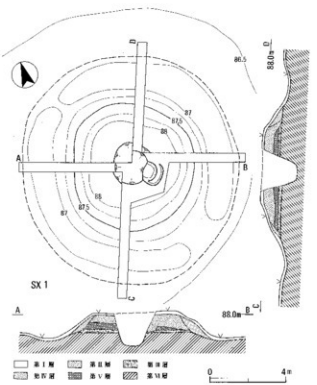
第３図　経塚中世墓配置図（1:300）

Ⅳ　丘陵頂上部の塚

1　ＳＸ１

丘陵頂上部に所在する塚である。古くより「経塚」と呼称されており、経塚中世墓もこの名称からとったものである。塚のある丘陵の頂上部は比較的平坦であり、塚は丘陵が東に向かって下る個所より僅かに６ｍ程上がった所である。塚の後方、西側はなだらかな平坦地が続いている。一方、北側は約15m程離れた個所より崩落によって急峻な崖となっている。下方の斜面にある墳墓群には、多数の礫を敷き詰めているが、この塚および周辺には礫はほとんど見当たらない。

塚は裾部の径９ｍ、高さ1.30ｍで、その周囲には幅1.50ｍ、深さ10cm程の浅い周溝が発掘前にも認められた。この周溝の外側まで径11.3ｍを測る。ほぼ円形を呈している。周溝の南側部分は２ｍにわたって明瞭ではない。塚の頂上部の標高は88.3ｍである。頂上部は径５ｍの平坦面となっており、中央には径２ｍ、深さ1.5m程の盗掘による穴があけられていた。この盗掘坑を中心に十文字に幅50cmのトレンチを設定した。その結果東側のトレンチにおいて、地表より50cm程の深さの個所で主体部らしき土壙を確認したため、この部分を拡張した。



第４図　ＳＸ１（1:200）

（１）層序

第Ⅰ層：表土。全体に10cm程の厚さで、塚を覆っている。

第Ⅱ層：黄褐色土。周溝および周辺を削り取り、盛り上げた盛土である。厚さ70cm近くある。

第Ⅲ層：黒色土。20cm程の厚さで、旧表土と考えられる。

第Ⅳ層：茶褐色土。塚の肩部分にレンズ状に傾斜して堆積している。東側では厚さ30cm程であるが、南側では僅か10cm程の厚さである。塚を造る時、肩部分に盛土して、形を整えたものであろう。

第Ⅴ層：黒色土が混ざる黄褐色土である。第Ⅱ・Ⅳ層同様盛土である。厚さ20cm～30cm。

第Ⅵ層：黄褐色土。地山。

（２）主体部

第Ⅴ層上面より切り込んで造っている。墳丘中央やや南寄りの個所である。幅85cm、深さ第１層上面より50cmで、底部分には暗茶褐色土が薄く堆積しており、埋土の大部分が第Ⅱ層の黄褐色土である。土壙の南側には僅か10cm足らずの浅い段状部分が、幅30cm程で巡っている。主体部の延長部分は盗掘坑の北の面には認められず、主体部は径80cm程度の円形もしくは楕円形を呈していたものと思われる。主体部からは遺物の出土はなかった。

（３）遺物

主体部周辺の拡張部分より50片近くの土器片が出土している。

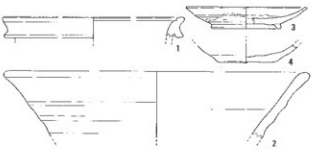
常滑甕（１）：盛土中より出土。口径19cm位の大形の常滑焼甕の口縁部破片である。折り返し状口縁で、折り返し部分は僅か２cm程で、内側は低い段状となる。破片を見ると、肩部はあまり張らずに丸い胴部につづいている。内面及び表面は濃い赤褐色であるが、濃緑の自然釉が見られ、それが剥落し、灰色となっている部分もある。細かい砂粒を含んでいる。

渥美甕：同一個体片で計17点ある。渥美焼甕の頸部から肩部にかけての破片と、胴下半部の破片である。頸部の径12㎝程で、頸部近くと肩上部に４条の櫛状工具による沈線が施されている。胴下半部はヘラケズリされる。全体に黄灰色を呈し、胎土は緻密であるが焼成は悪く、軟質なものである。

渥美鉢（２）：灰釉皿（３）、土師器杯（４）とともに東側のトレンチの周溝より出土したものである。口径32㎝近くの渥美焼鉢である。大きく開く口縁部の破片で、胎土には径２㎜程の細砂を含んでいる。口縁部は上端に平坦部をもち、外側は丸く仕上げられている。底部近くはヘラケズリをしている。暗灰色を呈している。

灰釉皿（３）：口径12.6㎝、器高2.3㎝の小形の灰釉皿で約２分の１の破片である。口唇部が薄く小さく仕上げられるが、底部は６㎜と厚手である。外方に開く高台を貼り付けている。高台周辺はヘラケズリし、内側に糸切痕を残す。口唇部内外には少し緑色を帯びた黄色の灰釉が施されている。地はやや白っぽい黄灰色で、胎土は緻密である。

土師器杯（４）：周溝内より出土。底径7.4㎝の土師器破片である。磨耗が甚だしく、調整法は不明であるが、ロクロ挽きによるものであろう。胎土には粗い砂を多量に含み、白っぽい褐色を呈している。



第５図　ＳＸ１出土遺物（1:4）

Ⅴ　尾根中央の土壙墓

ＳＸ１のすぐ東南側、尾根を３ｍ程下がった個所で、標高83m前後である。現状は幅５ｍ、奥行２ｍの半円形の緩やかな傾斜地である。周辺には礫が散乱しているのが認められた。同じ標高の個所では、他にこのような状態の所は見られず、丘陵尾根中央部で東に向かって位置しており、他の墳墓に比べて最も眺望の良い個所を占地している。

１　ＳＸ２

（１）形状

丘陵の斜面を方形に削り出し、テラス状にし、墓域を形成している。斜面の削平は幅6.2m、奥行３ｍにわたっている。大小２個所からなる。尾根筋に向かって左の南西側は3.9m×3.0mの方形であり、右側は小さく幅2.6mで、前部分は斜面に向かって窪んでおり、一部分崩れたようになっている。

左側の墓は、表面にやや長楕円の径15㎝×30㎝の礫を方形に巡らし、奥半部にはやや小さな礫を敷き並べている。中央部には一辺1.3mの正方形に近い形で並べられており、これを正面から見ると、逆の凸形となる。この礫群の中心には五輪塔の火輪（６）があり、空風輪（５）がすぐ脇に転げ落ちた状態で在った。外側の方形に巡る礫群の回りには一段低い礫上より25㎝程の深さの溝が後方と南側に巡っている。

表面の礫を取り除くと、中央の礫の下には1.35ｍ×0.9mの長方形の土壙が掘られている。深さは礫下より60㎝を測る。土壙はほぼ垂直に近く掘り込んでいる。壙内には暗茶褐色土が埋まっている。礫群中央の火輪の下には水輪（７）、地輪（８）が沈み落ちた状態で見つかったが、他の遺物は無かった。表面の礫と地山は約20㎝の間隔があり、その間には削平した旧表土と地山の土が平坦に敷かれており、斜面を削平して墓域を造った後、土壙を掘り込んだ状況であった。

現状では礫の敷設は逆凸形に認められるが、両脇の礫列はさらに前方へ続くようであり、凸形の中央の礫群の前方にもやや大型の礫の列状が見られ、中央の土壙を中心に３ｍ四方の方形の礫の敷設があったものが、その後に現状のように前方部が崩れ、さらに礫が失われたものと思われる。

なお、右側の礫群は、左側に比べやや大きな礫が10個近く固まった状態であり、最下部には地輪（10）が据えられており、すぐ右脇に空風輪（９）が転倒

していた。この礫群の在る個所は、山の斜面がやや窪んでおり、礫の下には何ら遺構はなかった。

左側の付属的な施設であったのか、それとも、ある期間を経た後の、別の遺構であるのか不明である。

（2）五輪塔（5～10）

5～8は中央の土壙墓から出土したもので、一体のものと考えられ、全高63cm程度となる。

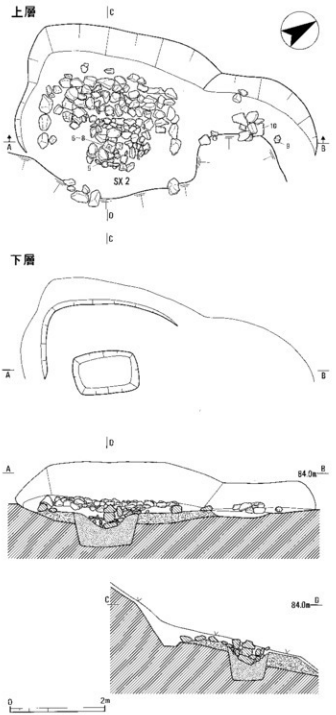
空風輪（5）：先端部を一部欠損する。尖り気味の空輪と、下がすぼまる風輪とからなる。表面は平滑ではなく、横断面も円形とはならず、多角形の面取り状に整形している。下端部の柄は太くやや長い。現高18.4cm、径12.2cm。

火輪（6）：空風輪同様、表面は平滑ではなく稜線も明瞭ではない。笠部の四隅を僅かに反り気味に整形しているが、屋根の勾配は一定でない。一辺24.6cm、高さ14.2cm。頂部の枘穴は径8cm、深さ3.5cmを測る。

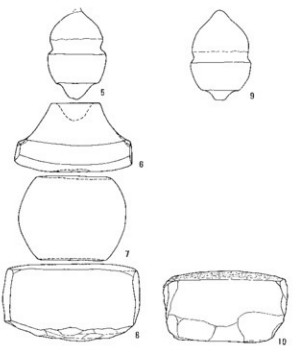
水輪（7）：上部径15.6cm、下部径14cm、中央部最大径22.5cmと火輪より一回り小さい。上下端面は、ともに5㎜程窪み、凹面状となる。高さ17.6cm。

地輪（8）：上面は一辺25cmの方形で、高さ16.1cmである。周囲の四面と上面は比較的平滑に仕上げているが、下面は打ち欠いたままの状態で、凹凸がはげしい。

空風輪（9）・地輪（10）：右側の配石より出土したもので、いずれもこれまでのものと同様花崗岩製である。9は5に比べ、径、高さともに小さく全面を平滑に仕上げている。



第6図　ＳＸ２（1:80）



第7図　ＳＸ２出土遺物（1:8）

Ⅵ　中央墳墓群

ＳＸ３からＳＸ12の10基の墳墓は、ＳＸ２より約２ｍ下がった、標高79～80mの二段目の段状部分に位置している。丘陵の尾根筋を中心に延長22mにわたって、高さ20cm～40cmの低い段状部分を削り出している。南より尾根部分までの約７ｍは、幅１ｍ足らずの配石群であるが、中央部分及び北端近くでは幅２ｍ以上の広範囲に配石が見られ、数基の墳墓が重複している状況である。

北端部分のすぐ上には幅３ｍ×２ｍの範囲に礫が散乱しているのが見られた。このため、礫下を掘り下げたが、明瞭な土壙は確認できず、遺物の出土も見られなかったために墳墓とはしなかった。

丘陵は全体的には東に向かって傾斜しているが、墳墓群は等高線に沿って彎曲している個所もある。このため墳墓の位置関係等の方向は丘陵斜面に対して、左右、前後と記述する。

１　ＳＸ３

（１）形状

二段目の段状部分の最左端で、ＳＸ２の東南８ｍの個所である。拳大より人頭大の礫が弧状に並んでいる。中央部分の礫は、後世に取り除かれたのかもしれない。土師器小皿（11）が出土。弧状の中央部分に90cm×75cm、深さ50cmの方形の土壙がある。内部には暗茶褐色土が埋まっている。

（２）遺物（11）

土師器小皿（11）：口径8.5cm、やや厚手の小皿破片である。口縁部はヨコナデされる。胎土には細砂を含む。

２　ＳＸ４

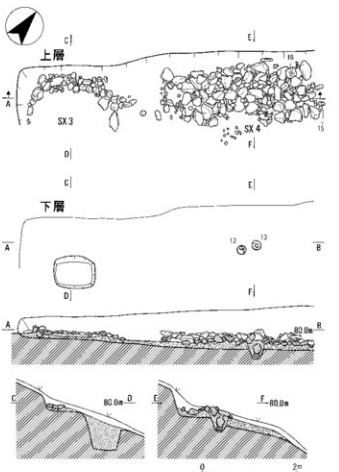
（１）形状

ＳＸ３より１ｍほど離れた個所で、左右３ｍ、前後幅1.2mの広さの配石群である。３基から４基の礫群が重複しているようである。右奥隅には五輪塔の火輪（16）が、その右側には空風輪（15）と地輪がある。礫群の下にはＳＸ３のような土壙は認められずに、礫群の中央に蔵骨器が２点（12・13）埋納してあった。いずれも径30cm足らずの小さな穴に埋められており、蔵骨器（13）の下には扁平な礫が敷かれていた。

礫に混ざって山茶椀（14）の破片が出土している。

（２）蔵骨器（12・13）

渥美三筋壺（12）：器高24.5cmの完形品である。口縁部が直立し、口唇部が横に引き出され、凸帯状となり、上端が平坦となる。頸部より肩部分にかけてはなだらかで、胴部も張らずに真っ直ぐ底部につづく。底部は径8.5cmと小さく、ヘラ切りのままである。肩部と胴下半部中央にヘラ描き沈線が一条ずつ巡っており、肩部の沈線下より底部にかけてはヘラケズリがなされている。口縁部より胴下半部にかけて濃緑色の釉が厚くかかり、胴下部まで滴り落ちている。地は薄い茶味を帯びた灰色で、胎土には細砂



第８図　ＳＸ３，４（1:80）

を含み、焼成は良い。

常滑広口壺（13）：肩部より上部を欠損する。肩部分は径23cmと大きく、真っ直ぐに底部へつづく。胴下半部は全面に細かいヘラケズリが縦方向に施されている。赤茶色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

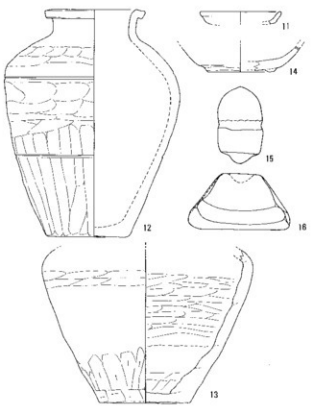
（3）山茶椀（14）

底径7.4cmの底部小破片である。貼り付け高台が付く。灰色を呈し、胎土は緻密である。

（4）五輪塔（15・16）

空風輪（15）：全高16cm、最大径9.5cmでやや小型である。粗雑なつくりで、断面も円形でなく四角状を呈している。空、風輪の境の溝も浅く、稜線も不明瞭である。

火輪（16）：笠部の一辺21.2cm、高さ11.5cmで小型である。空風輪同様やや粗雑なつくりで、笠部の稜線は不明瞭で、反りも小さい。頂部の枘穴は1.6cm程と浅い。下端面は平滑であるが、他の面は粗雑な状態である。



第9図　SX3，4出土遺物（11：SX3，12～16：SX4）（土－1:4，石－1:8）

3　SX5

SX4から1.5m程離れた右側部分で、一旦、段状部分がやや奥へ入り込んでおり、平坦部分が他の個所に比べて広くなる。この個所にも数基の礫群が重複しているようである。奥まった個所にSX5、その前面にSX6が、更に東側にSX7、SX8とつづくようである。

SX4と、このSX5との間にも礫の散乱が見られるが、遺物や遺構は確認できなかった。

（1）形状

一辺1.5mの方形で、外周には一回り大きな礫を巡らして墓域を限り、その内側にはやや小さな礫を敷き詰めている。この中央部分に五輪塔の水輪（26）地輪（27）が据えられている。50cm程東に離れて地輪がもう一個ある。中央の礫群の下には平面1.2m×0.75mの長方形で、深さ70cmの土壙がある。この土壙の右奥に取りつくように幅35cm、深さ50cmの溝が長さ1.5mにわたって掘られている。

土壙内からは古瀬戸製の水注、入子等の副葬品（17～23）が出土している。水注（17）は五輪塔地輪（26）のすぐ下にあったが、山茶椀2個体（22・23）は土壙底についていた。

土壙の右側肩部分には常滑製の蔵骨器（24）が埋納してあり、この蔵骨器を埋納した別の墓が重複していたものとも考えられる。

礫中より土師器小皿（25）が出土している。

（2）副葬品（17～23）

古瀬戸灰釉水注（17）：口径5.2cm、器高6.7cmの完形品である。小さく直立する口縁部に、あまり肩が張らない球形の胴部からなる。底部には糸切痕が残る。小型品であるが、器壁は全体に厚い。

注口は口径、長さともに1cm足らずで、肩部分に付けられている。この注口が付く肩部分に5条の櫛描沈線が巡っている。淡い黄緑の釉が全面に施されており、釉は内側にもおよんでいる。胎土は緻密で焼成も良い。

古瀬戸入子（18～20）：口径4cm足らず、器高1.2cmの小さなものである。薄手の口縁部を輪花状に折り曲げ八弁を形作っている。底部は糸切痕を残す。胎土は緻密で白灰色を呈し、内面および口縁部外側

に黄灰色の灰釉が施されている。

青磁椀（21）：胴下半部の小破片である。推定口径15cm程度のものと思われる。白っぽい青灰色の胎土で、濃緑の釉が厚くかかり、表面には肉厚の蓮弁が描かれている。

山茶椀（22・23）：いずれも口径13.5cm、器高５cm程度である。２点とも胎土、調整法、色調ともに同様である。底部より口縁部にかけて、胴部は膨らみをもたずに、真っ直ぐにのび、口縁端部は断面三角形に仕上げられている。底部には糸切痕が残り、高台は付かない。底部内面には指による一方向のナデが見られる。淡い黄味をおびた灰色で、胎土には白っぽい砂粒を僅かに含んでいる。

（３）**蔵骨器**（24）

常滑壺（24）：口縁部を欠失する。頸部は細く、あまり強く張り出さないなだらかな肩部から僅かに膨らみをもつ胴下半部となる。底部はヘラ切りのままである。肩部から下はヘラケズリされる。上部は横方向に、下半部は縦方向に面取り状にヘラケズリしている。肩部分には濃緑色の自然釉が見られる。胴下半部は赤茶色で、胎土には細砂を多く含み、焼成は良い。

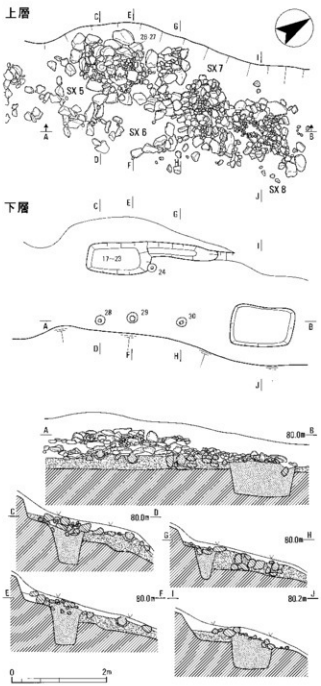
（４）**遺物**（25）

土師器小皿（25）：口径8.2cmの小皿破片である。黄灰色で胎土は緻密である。

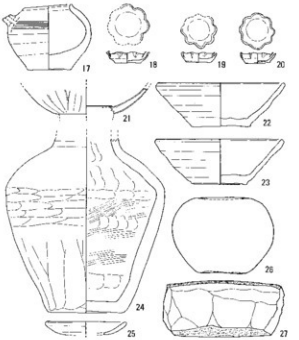
（５）**五輪塔**（26・27）

水輪（26）：径21.3cm、高さ18.2cm。算盤玉状に中央が外方に張り出す。上下面とも僅かに窪んでいる。表面はあまり平滑ではない。

地輪（27）：一辺25.5cm、高さ11.8cmで、上下面は礫の自然面を残し平滑である。他の周囲の側面は、打ち欠いたままの未調整で凹凸がはげしい。



第10図　ＳＸ５，６，７，８（1:80）



第11図　ＳＸ５出土遺物（土－1:4，石－1:8）

4　ＳＸ６

（１）形状

ＳＸ５の前部分に接するようにつくられている。楕円形の礫が２ｍ×1.4ｍの長方形に巡っているが、斜面下方部分と内側の礫が大部分なくなってしまっている。方形の中央部分すぐ後方に先にＳＸ５の項で述べた五輪塔の地輪および蔵骨器（24）がある。中央の少ない礫の下には土壙は見られず、中心部分に古瀬戸壺（28）が、やや右寄りに常滑壺（29）の２個の蔵骨器が埋納してあった。この２個の蔵骨器は地表下すぐから出土している。

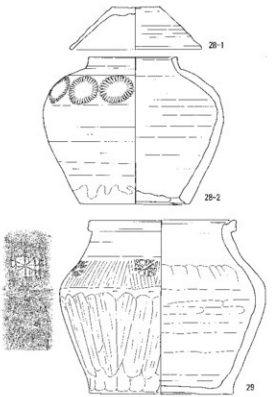
（２）蔵骨器（28・29）

山茶椀（28－1）：口径13.8cm、器高4.5cmの山茶椀を蓋に使用したもので、ＳＸ５の副葬品にあった山茶椀（22・23）と同様の形態で調整もかわらない。

古瀬戸灰釉印花文広口壺（28－2）：口径9.2cm、器高15.5cm。口縁部分が小さく直立し、なだらかな肩部から胴部につづく。胴部は球形に近く、底部は径11.4cmと大きい。胴部最大径は胴上部の肩部近くにある。口唇部は５mm近くと薄手であるが、徐々に厚くなり底部では1.5cm程の厚手となる。底部は糸切痕を残し、径５mm×９mmの小さな孔が一個穿たれている。

肩部には菊花が13個印刻されている。菊花の径は約３cmで、花弁は28葉である。口唇部を除き表面には全面に厚く濃緑色の釉が施されている。胎土は緻密で、稀に小さな砂礫を含む。

常滑広口壺（29）：口径14.6cm、器高18.5cmで、通常の広口壺に比べ底部は15cmと大きい。やや内彎する口縁部の端部は折り返し状口縁で、内側は低い段状となる。肩部には斜線と縦線の押印が２個所見られる。肩部より下の胴部には縦方向のヘラケズリが、幅２cmから３cmの弱い面取り状に施されている。底部はヘラ切りのままである。茶褐色を呈し、胎土は緻密である。



第12図　ＳＸ６出土遺物（1:4）

5　ＳＸ７

（１）形状

ＳＸ６のすぐ右側で、ＳＸ６に左側部分を切られた状態で、ＳＸ７もＳＸ８の左側部分を切りとるようにて重複した状態である。やや大きい礫による明瞭な方形状の配石は認められず、大小の礫が長楕円形状に散在している。硬下には土壙は無い。

ＳＸ６に接する個所から常滑製の蔵骨器（30）が出土している。周囲には大小の礫が蔵骨器を取り囲む状況であり、壺の底にも平坦な礫が敷かれていた。

（２）蔵骨器（30）

常滑壺（30）：口径12cm、器高21.2cmの常滑製のやや小型の壺である。短く直立する口縁部は折り返し状となり端部は丸く仕上げられている。肩部は直線的に張り出し、胴部は僅かに膨らみ球形に近い。底部はヘラ切りのままで、先述の24の壺に比べて薄手である。肩部より胴部にかけては、部分的に濃緑色の釉が見られる。赤茶色を呈しており、胎土には多くの砂粒を含む。肩部にはヘラ描きによるカマ印が描かれている。

6　ＳＸ８

（１）形状

ＳＸ７のすぐ右、左側を切られる状態である。乱雑であるが、周囲には大きな礫を、内側にはやや小さな礫を敷き並べている。左右1.2m、前後1.5mの

範囲で、前部分が一部破壊されているようである。礫の下には1.35m×0.75m、深さ55cmの長方形の土壙がある。土壙内からは遺物の出土は無かったが、上層の礫中より山茶椀（31）と土師器小皿（32）が出土している。

（2）遺物（31・32）

山茶椀（31）：口径12.8cm、器高4.8cm。高台が剥落しているが、形態、調整法、胎土、焼成とも先述の山茶椀と同様で、口縁部が直線的に開き、口唇部が断面三角形となる。濃い黄色味を帯びた灰色を呈しており、胎土には砂礫を少し含み、焼成は良い。

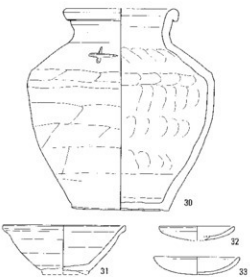
土師器小皿（32）：口径8cmの小さな皿である。底部を欠く。淡い褐色で胎土は緻密である。

7　ＳＸ９

（1）形状

ＳＸ８の1.5m程右側に離れた個所に、やや大きな礫が10個ばかり散乱しており、さらに右方に礫が1.5m程の幅で４m近くにわたって集中する。ＳＸ９とＳＸ10の２基の墓が隣接していると思われるが、その墓域は明瞭ではない。下層に２基の土壙があり、一応２基の墓とした。ＳＸ８との間の礫群も墓域とも考えられたが、蔵骨器も副葬品も認められなかった。

礫群の下には1.45m×1.6m、深さ0.45mの隅丸方形を呈する土壙がある。他の個所で検出した土壙の長軸は全て、等高線に並行するが、このＳＸ９のみは直交する。



第13図　ＳＸ７，８，10出土遺物（30：ＳＸ７，31・32：ＳＸ８，33：ＳＸ10）（1:4）

土壙内から遺物の出土は無く、土壙上に敷かれた礫が、やや深く落ち込んだ状態であった。

8　ＳＸ10

（1）形状

前述のようにＳＸ９との区別は明瞭でないが、その範囲は3.7m×1.4m程で、ＳＸ９、ＳＸ10ともに前部分の礫は散逸してしまったようである。土師器小皿（33）が出土。

この部分の下には２個の土壙が重複した状態で見つかっている。1.1m×0.75m、深さ0.5mの方形の土壙のすぐ左側に並行して同じ幅で、やや浅い40cmの土壙がある。この浅い土壙からは少量の人骨片が出土している。右側の新しい土壙からは、遺物の出土はなく、大きな礫が落ち込んでいたのみである。

（2）遺物（33）

土師器小皿（33）：口径９cm、器高1.8cm。磨滅が甚だしい。砂粒を多く含んだ胎土である。

9　ＳＸ11

（1）形状

ＳＸ10のすぐ右側で、1.7m×1.9mの範囲に比較的小さな礫を密に敷き並べている。左側部分がＳＸ10に一部切られた状態である。

礫群の中央には山茶椀で蓋をした蔵骨器（34）が、小さな穴に安置されていた。

また、この方形の礫群の右側にくっつくように小さな礫に囲まれた径30cmの扁平な礫がある。その礫の下には、山茶椀で蓋をした蔵骨器（35）が、あたかも小石室に入ったように礫に囲まれた状態で出土した。

この蔵骨器は次のＳＸ12の前方右側にある配石とともに、ＳＸ11・ＳＸ12よりも古い時期の墓域の中心部分であるかもしれない。

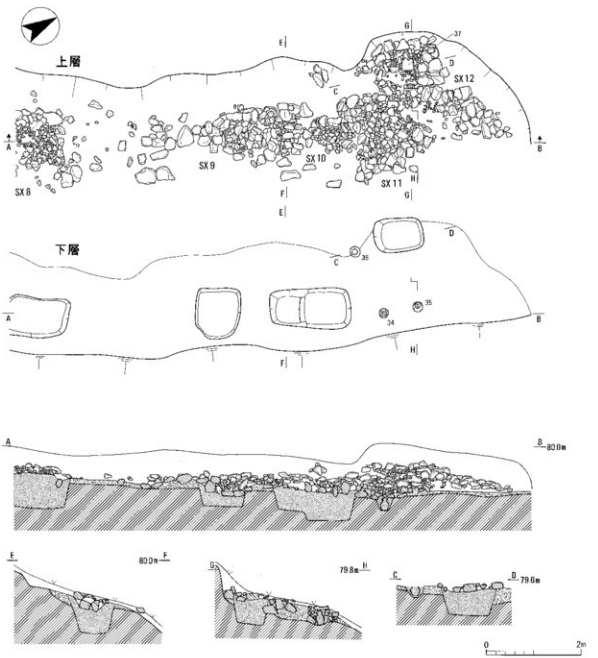
（2）蔵骨器（34・35）

渥美三筋壺（34－2）：口径10.9cm、器高25.2cmの渥美窯の壺である。口縁部は短く、頸部のくびれは緩い。口唇部は外方に引き出され、上端は幅１cmと広く、浅い凹線状となる。肩部はあまり張らず、胴部は長い。胴下半部、底部はヘラケズリされ、ＳＸ

4の壺（12）に比べ厚手で、1.0～1.5cmである。肩部および胴中央部にヘラ描き沈線が巡る。頸部にも僅かに沈線が残る。中央の沈線より下はヘラケズリされる。口縁部内側2cm程度の個所より、外面の胴上部にかけて、やや淡い濃緑色の釉がかかる。薄い茶味をおびた灰色で、胎土は緻密で焼成は良い。

古瀬戸灰釉四耳壺（35－2）：口径11.6cm、器高28.8cm。口縁部と高台の一部が欠けている。強く外反する口縁部は折り返し状で、大きく肩部が張り出し、胴部は球形に近い。器厚8㎜でやや薄手である。肩部には幅2.5cm、厚さ3㎜の耳が三角状に尖り気味に高く、4個貼り付けられている。耳には、5条の櫛描沈線が施されている。胴下半部はヘラケズリされ、胴上部と下半部にヘラ描き沈線が巡る。口縁部内面より高台外側まで、全面に淡黄緑の釉が薄くかかる。釉の濃い部分は、焼成の際に剥落してしまっている。胎土は緻密で、焼成は良い。

山茶椀（34－1・35－1）：これまで述べてきた山茶



第14図　ＳＸ８，９，10，11，12（1:80）

椀と同形態のものである。僅かに（35－1）の方が口径、器高ともに大きい。直線的に開く口縁部で、底部は糸切痕を残し、低い高台を貼り付けている。高台には籾痕がつく。内面底にはロクロ仕上げの最後に水滴を取り除くための一方向のナデ痕が見られる。胎土には砂粒を多く含み、（35－1）には一部自然釉が出ている。

10　ＳＸ12

（1）形状

尾根中央の墳墓群の北東端部に位置するＳＸ11の後方、段状部分がやや奥まった所で、北側はすぐに崖となる。20～30cm四方の方柱状の礫が、1.7m×1.4mの方形に一巡するように並べられ、内側には小さな礫が敷かれている。中央には五輪塔の地輪（37）が据えられていた。

礫下には1.05m×0.7m、深さ45cmの土壙が掘られていた。土壙内からは遺物の出土はない。墓域を区画する礫列のすぐ左に接する個所、段の下には、蔵骨器（36）が埋納されていた。この蔵骨器はＳＸ12に伴うものではなく、後に埋納された可能性が強いが、蔵骨器に伴う礫群を明瞭にすることができなかったため、ここではＳＸ12と一緒に記述した。

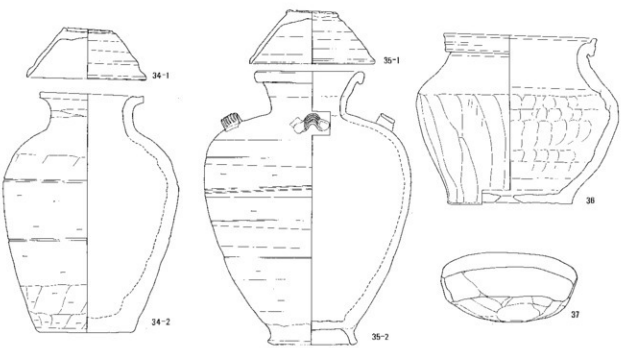
ＳＸ12の右前方、北東側部分には削られた段に沿って礫群が1.5mにわたって敷かれた状態にあった。一見、墳墓を区画するような状態であるが、丘陵の斜面と並行するものではない。蔵骨器（35）を埋設した墳墓の一部かとも考えたが、やや距離を置いており、礫下には遺構や遺物は認められなかったために墳墓とはしなかった。

（2）蔵骨器（36）

常滑広口壺（36）：口径16.0cm、器高17.8cmの常滑焼の広口壺である。器高に対して口径、底径が大きい。口縁部は折り返し状口縁で、幅２cmの帯状となる。肩部はあまり張らない。底部はヘラ切りのままで、胴部に比べ薄手で、穿孔されている。胴下半部は縦方向に幅２cm～３cmでヘラケズリしている。赤茶褐色を呈し、胎土には細砂を多く含む。

（3）五輪塔（37）

地輪（37）：一辺28.8cm、高さ14.5cmの地輪。上端が自然面を残して平滑であるが、他の側面は打ち欠いたままで、不整形に加工されている。花崗岩製。



第15図　ＳＸ11,12出土遺物（34・35：ＳＸ11，36・37：ＳＸ12）（土－1:4，石－1:8）

Ⅶ　南東部墳墓群

ＳＸ13よりＳＸ25までの13基の墓は、尾根中央の墳墓群より更に一段下がった、標高79m前後の個所にある。第二段目同様に山の斜面を削り、低い段状部分をつくっている。ＳＸ３のすぐ下から、南方向へ等高線に沿って約25mにわたって存在する。第二段目の中央墳墓群は尾根の中心に広がり東面するが、この三段目の墳墓群はやや南向きの斜面にある。

1　ＳX13

最も西に位置している。40cm足らずの段状部分の崖下に、35cm前後の方形の礫が10個ばかり段に並行して1.4mにわたって並んでいる。その前方には細かい礫が敷かれていたようであるが、殆んど無くなってしまっている。礫の下には径１m×1.6m、深さ70cmの楕円形の土壙が段下に接するようにある。土壙の下層には、他の土壙では見られない30～50cmのやや大きな礫が十数個敷かれたようにあった。しかし、この礫の上面は平坦ではない上に、礫が土壙の底に接しておらず、棺の下に敷いたものか、それとも上部の礫が落ち込んだものか不明である。礫以外に土壙内から遺物の出土は無い。

2　ＳX14

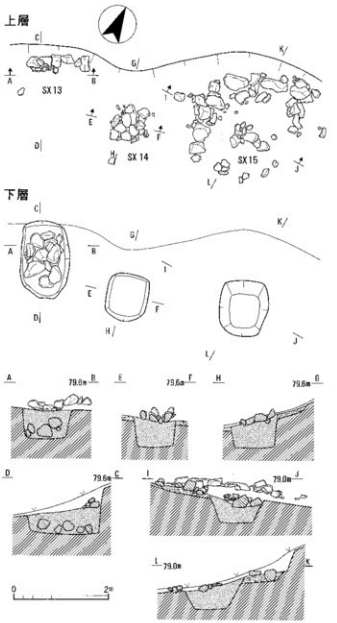
ＳＸ13から僅か１mばかり離れた個所で、80cm四方に礫が重なっているのみで、それを取り巻くような礫は何も見られない。この礫の下には、礫群より一回り大きな0.9m×１m程の正方形で、深さ50cmの土壙がある。土壙内からは礫も遺物も出土しなかった。

3　ＳX15

ＳＸ14のすぐ右の東側で、中心部に10個ばかりの礫が重なっている。その周囲には人頭大の礫が、ややいびつであるが、2.5mの方形に巡る。中心の礫と周りの礫との間は、幅40cm程の礫の無い個所となっている。前方部の礫は散逸したものか、小さな礫が少量見られるのみである。中央の礫群の下からは、それより一回り大きい方形の土壙が見つかっている。1.1m×1.2mで、深さは50cmと浅く、遺物の出土は無い。

4　ＳX16

ＳＸ15の中心部より３mほど東寄りの個所で、径20cm程度の礫が、90cm×140cmの方形にあり、それを取り囲むように径40cm程度の大きな礫が、その周囲に数個見られるが、大部分は散逸してしまっているようである。中央の小さな礫も、斜面下方部分が

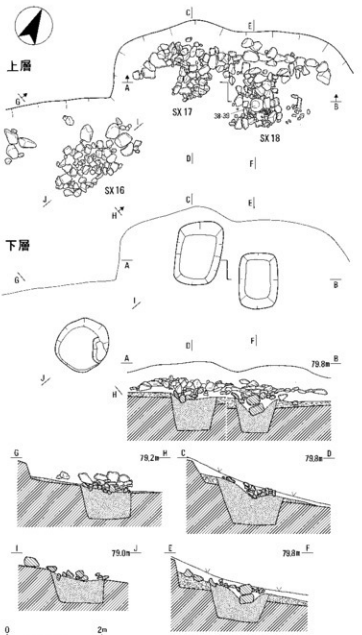


第16図　ＳＸ13,14,15（1:80）

無くなっているものと思われる。礫下には他の墳墓同様に土壙は存在するが、方形ではなく円形に近く、径1.05m×1.25m、深さ65cm程で、西側が一段深くなっている。遺物の出土は無い。

5　ＳＸ17

ＳＸ16のすぐ後ろで、段状部分が1.5m程奥へ入り込み、幅4.50m程の墓域をつくっている。この墓域はＳＸ16より古いものと思われる。ＳＸ17とすぐ右のＳＸ18は並んでいる。両者の新旧関係は明瞭ではないが、ＳＸ17の方が新しいようである。



第17図　ＳＸ16,17,18（1:80）

ＳＸ17はゆるく弧状に巡る段の左、西寄りの個所である。礫群が一辺２m程の方形に巡り、その中央部に80cm四方のやや小さな礫群が凸形に前方に突き出た形になる。凸形の礫群の下には0.9m×1.4m、深さ85cmの方形の土壙がある。土壙内から遺物の出土は無い。

6　ＳＸ18

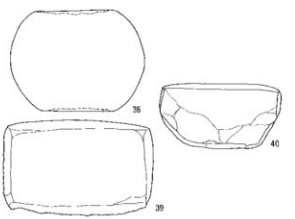
（1）形状

すぐ右側、ＳＸ17に接している。もともとはＳＸ17の部分まで広がっていたものと思われる。ＳＸ17とほぼ同形態であるが、一回り大きいものである。中央部の前方に凸形に出る方形の礫群は１m×1.1mで、後方の礫群は西部分をＳＸ17に切られているが、東西幅３m程度と思われる。中央の礫群の中心部分には、五輪塔が建てられていたようであり、水輪（38）と地輪（39）が、土壙に落ち込んだ状態であった。他の空風輪、火輪は見当たらない。土壙はＳＸ17よりやや小さく、0.8m×1.2m、深さ60cmである。土壙内から遺物の出土は無い。

（2）五輪塔（38・39）

水輪（38）：上端径15cm、下端径16cm、中央最大径28.3cm、高さ21.2cmの花崗岩製の水輪である。上下とも８mm程の凹面状に整形されている。

地輪（39）：31.3cm四方の方形で、高さ20cmの花崗岩製の地輪である。全体を丁寧に平滑に仕上げている。



第18図　ＳＸ18,19出土遺物（38・39：ＳＸ18,40：ＳＸ19）（1:8）

7　ＳＸ19

（1）形状

ＳＸ18の右側、北東へ２ｍ程離れた個所に位置する。大きな松の木によって左奥北西側が破壊されており、比較的大きな礫が散在している。ＳＸ17やＳＸ18のように中央の礫群と、それを取り巻く礫群といった明瞭な区別はない。中央の礫群のみが残り、他は散逸してしまったものかもしれない。礫群は一辺1.5m程の方形をしていたものであろう。中央には五輪塔の地輪（40）が据えられていた。地輪の下には厚さ10cm程の扁平な礫が敷かれてあった。しかし、他の礫群のように礫下に土壌は見当たらない。

（2）五輪塔（40）

地輪（40）：一辺26cm、高さ14cmの地輪である。上面は平滑に仕上げられるが、下方は大きく打ち欠いたままである。

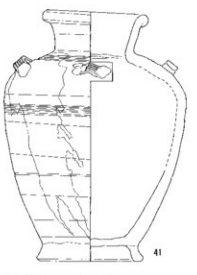
8　ＳＸ20

（1）形状

ＳＸ19のすぐ右、北側に僅か１ｍほど離れた個所である。十数個の礫が散乱した状態で、大部分は散逸してしまったものと思われる。崖際には径15cm×20cm、厚さ10cmの扁平な礫で蓋をした状態で、蔵骨器（41）が浅い穴に埋納されていた。

（2）蔵骨器（41）

古瀬戸灰釉四耳壺（41）：口径11.0cm、器高26.3cm。僅かに外反する口縁部は折り返し状で、端部は丸く仕上げられている。肩部はなだらかで、胴部もあまり張らずに底部へつづく。底部はやや外方に高く張り出す貼付高台がつく。全体に厚手で、器厚1.2cm。



第19図　ＳＸ20出土遺物（1:4）

肩部には幅２cm、厚さ２mmの帯状の耳が４個貼り付けられ、耳には４条の櫛描沈線が施されている。同様の櫛描沈線は、肩上部、胴上部にも施されている。胴下半部はヘラケズリされ、底部もヘラケズリされる。全面に濃緑色の釉が施され、一部厚く流れるように縦に縮状となっている。

9　ＳＸ21

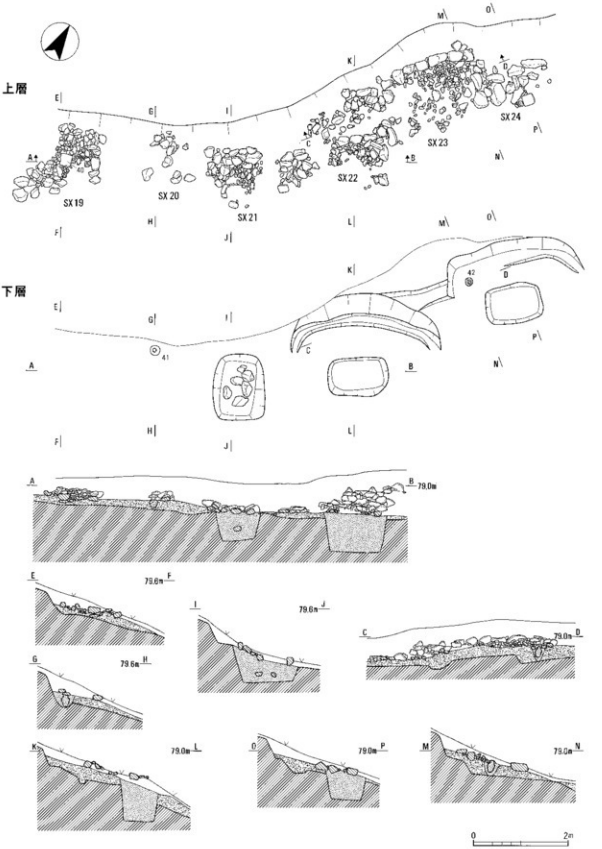
ＳＸ20の右側から小さな崖状の段は、斜面に沿ってやや北へ曲がっていく。ＳＸ20のすぐ東で、1.1ｍ×1.2ｍの方形を呈する礫群である。北西側は比較的大きな礫が、南東側には細かい礫が敷かれている。その下には1.4m×1.1m、深さ0.8mの方形の土壌がある。土壌の底近くには６個の比較的大きな礫があった。上部から落ち込んだ状態ではなく、棺台として使用されたものかもしれない。礫以外に出土遺物は無い。

このＳＸ21のすぐ東にも比較的大きな礫が、一辺80cm足らずの方形に配石された状態で見つかった。しかし、礫下には土壌もなく、蔵骨器も埋納されていなったかたので、墓とはしなかった。あるいは次のＳＸ22の西側の一部かもしれない。

10　ＳＸ22

段状部分は、この個所より北へのびている。ＳＸ21のすぐ右で、弧状に巡るやや大きな礫からなる群と、その後方の一見乱雑に配石された礫群とからなる。これは次のＳＸ23によって、一部破壊されてしまっているためと思われる。ＳＸ23が構築される前は、ＳＸ17やＳＸ18のように、中央部分には方形の礫群があり、それを取り囲むように後方に礫が巡っていたものであろう。ＳＸ22の中心部の礫群の後ろのラインは、ＳＸ21のそれと一直線に並ぶが、次のＳＸ23とは合わない。ＳＸ22の東西主軸はＮ45°Ｅに対して、ＳＸ23は更に北へ偏りＮ35°Ｅとなる。

上層の礫を取り除くと、中央の礫の下には径1.3m×0.8m、深さ0.7mの方形の土壌が掘られており、その後方に土壌から0.8m離れて、土壌を取り囲む



第20図　ＳＸ19,20,21,22,23,24（1:80）

ように弧状に巡る幅30cm、深さ10cm足らずの浅い溝が延長５ｍ近くにわたってある。土壙や溝から遺物の出土は無い。

11　ＳＸ23

（1）形状

４cm×20cm程度の方形の礫を長辺を揃え、一列に並べて2.5mの方形の区画を作っている。前方部の礫は後世に無くなったものかもしれない。この礫列に囲まれた内部には、やや細かい礫が北隅には比較的密であるが、全体に散乱した状態で見られる。

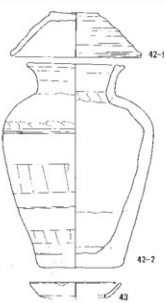
北側の礫列の中央下より山茶椀で蓋をした蔵骨器（42）が埋納されていた。墓域のほぼ中心部に扁平な楕円形の礫があり、この礫下にも蔵骨器が埋納されていた痕跡が認められたが、蔵骨器は既に無くなっていた。土師器皿（43）が出土している。

この個所に土壙は見られず、ＳＸ24の土壙が近接して在った。後方の礫列の下には、二段の低い段がある。このＳＸ23はＳＸ24より新しいものと考えられる。

（2）蔵骨器（42）

山茶椀（42－1）：口径13.7cm、器高4.6cm。これまでの山茶椀に比べて口径が大きいが、土器の調整法、色調や胎土は全く変わらない。内面には三分の一程に自然釉が見られる。

常滑三筋壺（42－2）：口径10.0cm、器高21.5cm。口縁部は僅かに外反し、端部は平坦に仕上げられる。



第21図　ＳＸ23出土遺物（1:4）

なだらかな肩部より底部へ直線的に続く。底部は３cm近くの厚手となる。肩部と胴下半部に一条の沈線が巡る。淡黄褐色を呈する焼成の良いものである。

（3）遺物（43）

土師器皿（43）：口径9.6cm、器高1.5cmの小皿である。口唇部に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものである。白っぽい灰色を呈し、胎土は緻密である。

12　ＳＸ24

（1）形状

ＳＸ23の北側を限る礫列に接し、やや大きな礫が十数個方形にまとまっていた。前方部には五輪塔の地輪が据えられていた。段の下および北側の礫は全く無くなってしまっているが、もともとは方形に巡る礫群があり、その中央に五輪塔が据えられていたものと思われる。五輪塔地輪の下には1.3m×0.75m、深さ55cmの方形の土壙が掘られており、約40cm離れて後方には幅40cm、深さ15cmの溝が、延長2.8mにわたって弧状に巡っている。土壙、溝から遺物の出土は無い。

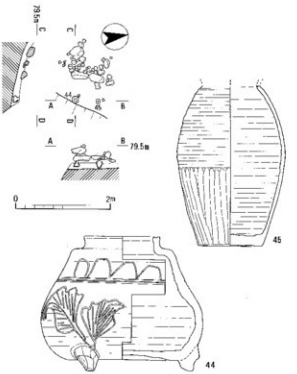
13　ＳＸ25

（1）形状

南東部墳墓群の後方の段は、ＳＸ24の北側でほぼ無くなり、山の斜面と変わらなくなる。ＳＸ25はこの個所より更に東側で、ＳＸ24の北1.5m、前述のＳＸ４のすぐ一段下の個所である。やや大きな礫を１m×80cmの方形に配石している。礫の下層には何ら遺構は認められなかったが、配石の前方50cm程離れた個所で蔵骨器（44）が、さらに50cm離れて蔵骨器（45）が表土下すぐに見つかっている。蔵骨器のすぐ東は40cm程の低い段となっている。

（2）蔵骨器（44・45）

古瀬戸灰釉画花文三足壺（44）：口径8.0cm、器高14.2cm。小さく直立する口縁部の端部は、小さくつまみ出され、肩部は直角に近く折れ、下膨れの胴部につづく。胴下半部から底部全体は、ヘラケズリされている。底の表面中央は８mm程度の上げ底になっている。３ヶ所に尖り気味の脚が貼り付けられている。



第22図　ＳＸ25（1:80），出土遺物（1:4）

胴部には沈線による文様が描かれている。肩下に２条の沈線を巡らし、その下に２枚の葉を上向きに描いている。葉脈も同じように沈線で描く。２条の沈線の上部にも、半円状の弧線を４個描いている。

全面に釉が施されており、内面には濃緑色の釉薬が厚く残るが、表面の釉薬はほとんど剥落してしまっている。素地は青っぽい灰色で、胎土は緻密で、焼成は良い。

褐釉壺（45）：現高17cm、細長い筒状の胴部。上半部にはロクロ痕が明瞭にのこり、下半部は１cm～1.5cm幅で縦方向にヘラケズリがなされている。底部には糸切痕が残る。胴部分は器厚４mmほどの薄手で、底部は1.2cmと厚い。外面全体に褐釉が施されているが、部分的に剥落している。素地は青みを帯びた灰色で、胎土は緻密で、砂粒を含み、焼成は良い。

Ⅷ　北部墳墓群

ＳＸ10からＳＸ12の一段下は、標高78.3m前後の平坦地となっている。等高線に沿ってやや彎曲して南北に長く、延長12mにおよぶ。幅は南側で２m、北端部で５mと広くなる。更に北へ続いていたと思われるが、崩落によって急な崖となっている。古くに、崖下の水田から採集されたといわれる蔵骨器はこの個所のものと思われる。ＳＸ26からＳＸ31までの６基の墓が数えられる。

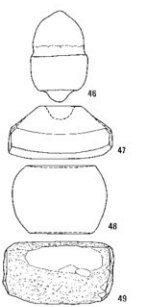
ＳＸ29からＳＸ31の１m程下も低い段をつくり、前面は幅４mの平坦な面状となっている。標高77.2m前後の個所である。この個所にも配石があり、ＳＸ32からＳＸ35までの４基の墓が認められた。すぐ北側が崖となる。

1　ＳＸ26

（1）形状

ＳＸ10のすぐ下で、一辺１mの正方形に配石された墓で、左前方部、南東部分は一部破壊されている。径30cm×15cm前後の楕円形の比較的均一な礫で構成されている。配石の中心には五輪塔が据えられており、水輪（48）と地輪（49）は元位置にあり、土壌内に落ち込んだ状態で、山側に傾いている。そのすぐ前方に空風輪（46）と火輪（47）が、転がり落ちた状態であった。

配石の下には、段に接して1.4m×0.95m、深さ55cmのややいびつな方形の土壙がある。土壙内から遺物の出土は無い。



第23図　ＳＸ26出土遺物（1:8）

（2）五輪塔（46～49）

46～49の４個で完全な形となる。全高53cm前後となる。いずれも花崗岩製。

空風輪（46）：高さ19.2cm、風輪径12cmの空風輪である。下部の枘は高さ2.4cmに仕上げられている。

火輪（47）：一辺21.5cm、高さ11cmの火輪である。頂部の枘穴は中心よりややずれている。屋根の反りはあまり強くはない。

水輪（48）：最大径19.8cm、高さ14.4cmの水輪である。上下面ともに僅かに凹面状に窪んでいる。

地輪（49）：一辺23.1cm、高さ12.8cmの地輪である。上面及び横面は平滑に仕上げられているが、下部分は荒く大きく割られた状態である。

2　ＳＸ27

（1）形状

ＳＸ26のすぐ北側、十数個の礫が配石された墓である。元来は一辺１mの方形に配石されていたものと思われるが、原形をとどめていない。方形の石組みの前方に約60cmの間隔をおいて、五輪塔の地輪が２個（54・55）並んでいる。更に、54の地輪の右奥に空風輪（51）、55の右脇にも空風輪（52）が転がった状態であった。

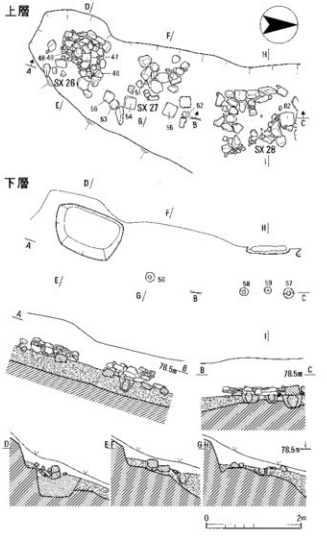
54の地輪の左脇にはもう一個の地輪（56）があり、この二つの地輪の間に水輪（53）があり、地輪（55）と空風輪（52）の後方にももう一点地輪があった。

ＳＸ27の範囲には計７点の五輪塔の地輪や空風輪等があるが、火輪が一点も見られない。

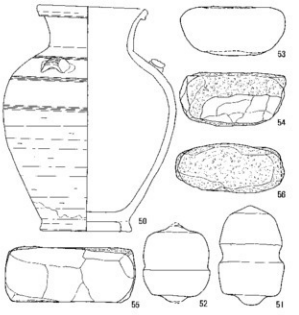
配石の下に土壙はなく、２個の地輪の中間部分に蔵骨器（50）が埋納されていた。

（2）蔵骨器（50）

古瀬戸灰釉三耳壺（50）：口径11.7cm、器高23.7cm。緩く外反する口縁部の先端は、折り返し状に丸く仕上げられている。肩部はあまり張らずに胴部につづく。胴下半部はヘラケズリされ、底部は平底で直立する高台が貼り付けられている。肩部と胴中央部には櫛描沈線が三段巡る。肩部に３ヶ所、幅３cm、厚さ５mm程の耳が貼り付けられている。耳にも櫛描沈線が三条施されている。口縁部の内側より高台を除く表面全体に、黄味をおびた濃緑の釉が施され、高台近くには釉が厚く溜まっている。胴下半部の釉は



第24図　ＳＸ26,27,28（1:80）



第25図　ＳＸ27出土遺物（土－1:4，石－1:8）

剥落している個所もある。全体に器厚が１cm程の均一で、丁寧なつくりである。胎土は緻密で、焼成は良い。

（３）五輪塔（51～56）

空風輪（51）：高さ20.8cm、空風部の径はほぼ同じで13.7cm。突出する柄は高さ1.5cm。花崗岩製。

空風輪（52）：高さ16.4cmの空風輪である。これまでの空風輪が縦長であったのに対して、比較的径に対して短いもので、空風部の径はほぼ同じである。下部には柄が作り出されているが、先端部を欠く。花崗岩製。

水輪（53）：高さに対して横長で扁平な花崗岩製の水輪である。高さ10cm、径22.2cm。

地輪（54）：一辺22.3cm、高さ11.2cmの花崗岩製の地輪である。上面、下面は平滑な自然面を残し、側面を打ち欠いて整形している。

地輪（55）：先の地輪に対して一回り大きく、一辺27.5cm、高さ11.6cmの花崗岩製の地輪である。54の地輪同様、上下端面は平滑に仕上げているが、横面は粗く大きく打ち欠いている。

地輪（56）：粗く打ち欠いた扁平な花崗岩の地輪で、高さ10.1cm、一辺22.9cm。

３　ＳＸ28

（１）形状

山の小さな尾根筋にあたる個所で、段状部分が僅かに西へ曲がる。ＳＸ27の0.5m程右、北側で、礫が一辺1.4m四方の方形に巡るものと思われるが、前方部は一部無くなっているようである。中央部にはあまり礫は無い。方形の礫群の北辺部分の中央に、五輪塔の地輪（62）が据えられている。すぐ北側にはＳＸ29の五輪塔の地輪が３基直線状に並ぶ。

この方形の礫群の下にもＳＸ27同様に土壙は見られなかったが、後方の段下には幅15cm、深さ10cm足らずの短い溝が掘られている。

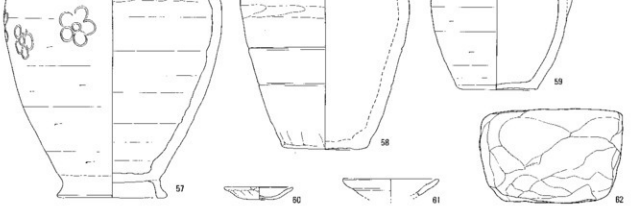
五輪塔の地輪（62）の真下には蔵骨器（57）が埋納されており、その左側にも30cmの間隔をおいて、蔵骨器が２個体（58・59）埋納されていた。これらの蔵骨器はこのＳＸ28の方形に巡る礫群の中央に、一直線に並んだ状態である。

この個所より土師器小皿（60・61）が出土している。

（２）蔵骨器（57～59）

古瀬戸灰釉印花文四耳壺（57）：口縁部を欠き、現高27.5cm。高さ２cmの高台も一部分欠失している。胴部最大径22.5cmを測る大型品である。器厚６㎜から10㎜の薄手である。胴下半部はヘラケズリされており、高台はやや外反気味に、直立するように貼り付けられている。肩部には幅３cm、厚さ５㎜の抓まれたような耳が４個貼り付けられている。耳には４条の櫛描沈線が施される。

耳と耳の間には、印刻による梅花文が４個描かれている。胴中央部にも同様の梅花文が７個描かれている。梅花文は径１cmの円を中心に、その周りに５弁を印刻している簡単な図柄である。



第26図　ＳＸ28出土遺物（土－1:4，石－1:8）

表面全体に濃緑色の釉が施されている。胴下半部には流れるように縞状に釉が厚くかかる。

常滑四耳壺（58）：口縁部を欠く。現高22.0cmの小型品で、ややいびつである。あまり張り出さない肩部から胴部、底部にかけて直線的につづく。底部は径8.0cmと小さい。肩部には幅広で厚手の耳を４個貼り付けている。耳には横方向に沈線が施される。一つの耳の左脇には引っ掻き様の文様が見られる。耳のすぐ下に２条の、胴中央部と下半部には各１条の沈線が３ヶ所に巡っている。

肩部分には自然釉がかかり、胴部、底部はヘラケズリされている。焼成の良い堅緻な土器である。

古瀬戸灰釉水注（59）：口縁部、把手、注口を欠く古瀬戸の水注である。現高14.5cm、胴部最大径14cm。全面に濃緑の釉がかけられているが、一部分剥落している。径４cmと細い頸のすぐ下に３条の櫛描沈線が、胴中央にも同様の櫛描沈線が巡っている。径2.3cmの注口は根元から剥落しており、１cm程の孔が穿たれている。注口の反対側には幅３cm、厚さ８㎜の板状の把手が貼り付けられていたようであるが、殆んど欠落している。緻密な胎土の焼成の良いものである。

（3）遺物（60・61）

土師器小皿（60）：いわゆるヘソ皿とよばれるもので、底中央が僅かに盛り上がる。径7.2cm、高さ1.3cmの小皿である。全面ナデで仕上げられる。口唇部に油煙痕がある。白っぽい灰色で、胎土は緻密。

土師器小皿（61）：口径10cmの小皿破片である。やや深いもので、ナデ調整。黄味を帯びた灰色で、胎土は緻密。

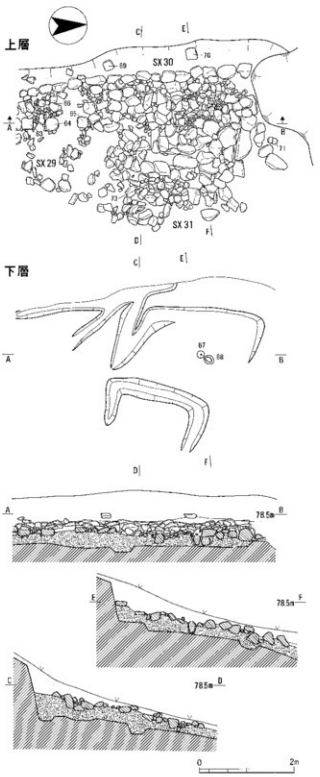
（4）五輪塔（62）

地輪（62）：一辺30cm、高さ19.8cm。出土した地輪の中でも最大級の大きなものである。上端は平滑に仕上げられているが、側面は打ち欠いたままである。花崗岩。

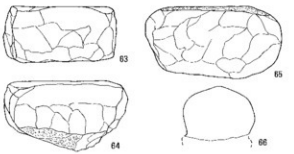
4　ＳＸ29

（1）形状

ＳＸ28の五輪塔の地輪（62）の右、北側に一直線に更に３個の地輪（63～65）が並んでいた。その後方にも空風輪（66）が転げ落ちた状態であった。比較的大きな径30cm×15cmの礫で、横長に後方1.7m、前後１ｍほどに区画されているように見られるが、右側の礫は次のＳＸ30の礫列のつづきかとも思われ判然とせず、これらの配石の単位は明瞭に識別し得ない。左側の地輪と空風輪の周辺には大小さまざま



第27図　ＳＸ29,30,31（1:80）



第28図　ＳＸ29出土遺物（1:8）

な礫が充満したように見られるが、右半分には礫は少なく散乱した状況である。

３個の地輪は前述のＳＸ28の地輪（62）と一直線に並び、ともに意識して据えられたものと思われる。地輪を中心とした配石の下には、土壙も蔵骨器も認められず、段下に幅30cmの溝が走っていたのみである。五輪塔の存在から一応ＳＸ29とした。

（2）五輪塔（63～66）

地輪（63）：一辺23.9cm、高さ11.8cmの地輪。上端の自然面を残す以外は打ち欠いたままである。

地輪（64）：一辺26cm、高さ15cmの地輪。地表に出る平滑な面を上端にして、他の側面は部分的に打ち欠き、尖り状にしている。

地輪（65）：一辺28.6cm、高さ15.3cmのやや大型の地輪。他の地輪同様に自然の面を上端にして他の面は粗く大雑把に整形している。

空風輪（66）：風輪の部分を欠く。空輪の径15.0cm、現高11.7cm。花崗岩。

5　ＳＸ30

（1）形状

ＳＸ29の後方の段下の礫列は一見直線状にさらに３mほど北方へ延びている。この一直線に並ぶ礫列の後方、一段高い個所に五輪塔の地輪と思われる礫が２個（69・70）据えられている。

ＳＸ30は段にほぼ並行して南北３m、東西２m以上の区画に、長楕円形の礫を並べ、その中に大小様々の礫を配石している。

ＳＸ30の北側にも墓域は続いていたと思われる。すぐ北側に大小の礫と空風輪（71）が散乱し、そこから先は崖崩れによって既に無くなってしまっている。

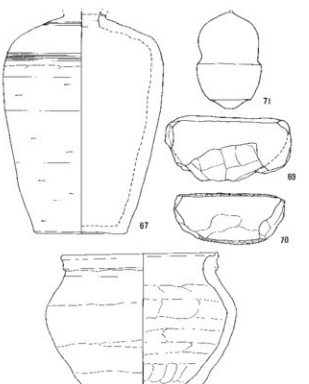
方形の礫群の下には、中心部分に２個の蔵骨器（67・68）が、接するように埋納されていた。

蔵骨器の埋納してあった礫を全て取り除くと、上層の礫群とはやや方向を異にした浅い掘り込みが見られ、ＳＸ30の構築以前に古い墓域があったものかもしれない。

（2）蔵骨器（67・68）

古瀬戸灰釉瓶子（67）：古瀬戸製。頸部より上部を欠く。現高23cm、肩を大きく張り出し、真っすぐに底部に続く。頸部と肩部分には４条の沈線が巡る。胴下半部はヘラケズりされ、底部近くは凹凸がある。全面に淡緑色の釉薬が厚くかかり、胴下半部は縦の縞状に濃淡を呈する。底部近くには釉薬が厚く溜まり、底には細かい砂や小石が付着している。施釉は頸部内面にも及んでいる。器壁はほぼ同じ厚さで1.2cm。胎土は緻密で焼成は良い。

常滑広口壺（68）：口径14.3～17.0cm、器高15cmの壺である。口縁部が焼き歪みにより楕円形となる。内側に浅い段状を呈する口縁部は分厚く幅広の折り返し状となる。肩部はあまり張り出さずに胴部から底部に丸く続く。赤褐色を呈し、肩部に自然釉が部分的に見られる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良い。器壁は均一で1.2cm程度。



第29図　ＳＸ30出土遺物（土－1:4，石－1:8）

（3）五輪塔（69～71）

地輪（69）：一辺25.5cm、高さ13.5cmの地輪。ＳＸ29の地輪（63～65）同様に自然面を上端にして、他の面は大きく打ち欠いたままのものである。

地輪（70）：一辺23.2cm、高さ10.5cmのやや小ぶりの地輪。扁平な石の自然面を上下にして、四方を粗く打ち欠いている。

空風輪（71）：高さ20.5cm、風輪径13.5cmの空風輪。柄は1.6cm。全体に丸くなだらかに仕上げられている。

6　ＳＸ31

（1）形状

ＳＸ30の前に位置する。ＳＸ30と明瞭に識別しがたいが、後方に弧状もしくは方形に巡る礫列があり、中央部に礫群による逆の凸型の方形をつくる形態となるものである。ＳＸ30に比べて方向をやや東にふる。ＳＸ30との新旧関係は判然としない。後方の礫列は延長2.3m、前後1.5mの範囲に礫が残る。中央の礫群は一辺１m。ＳＸ30に比べ使用している礫はやや小さい。中央礫群の後方部分に五輪塔の空風輪（73）があった。

区画を限る礫列の下には幅40cm、深さ20cm程の溝が、列に沿って方形に延長3.8mほど巡っている。礫を取り除いたが、蔵骨器は検出されなかった。ただし、山茶椀（72）が一点出土しており、あるいはこの個所にも蔵骨器が埋納されていた可能性がある。

（2）遺物（72）

山茶椀（72）：口径13.3cm、器高5.5cm。これまでの山茶椀と同様の形態で、口唇部は三角形を呈し、真っすぐ底部に続く。貼り付け高台には籾痕が見られる。高台部に糸切痕が残る。底部内面には一方向のナデがなされ、自然釉が見られる。黒みがかった灰色で、胎土には砂粒を含み、焼成は良い。

（3）五輪塔（73）

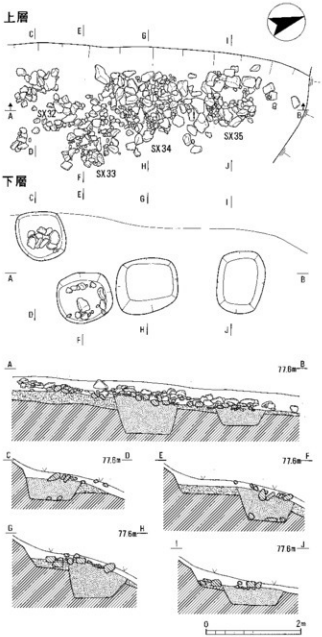
空風輪（73）：高さ15.1cm、径11.5cmの空風輪。空輪の径が風輪の径よりやや大きく全体に逆台形を呈する。柄は２cm。花崗岩。

7　ＳＸ32

（1）形状

ＳＸ26～ＳＸ31が並ぶ段のすぐ下で、標高76.5m前後の個所である。

径15cm～40cmの大小の礫が十数個まとまっている。もともとは、もっと多くの礫が集積されていたものであろうが、そのほとんどは斜面下方に転落してしまったようである。礫群の下には、１m×1.05



第30図　ＳＸ31出土遺物（土－1:4，石－1:8）

第31図　ＳＸ32,33,34,35（1:80）

m、深さ45cmのやや歪んだ方形の土壙がある。壙底には十数個の礫が敷かれた状態で見つかっている。遺物の出土は無い。

8　ＳＸ33

（1）形状

ＳＸ32の北東側の右前方に出た個所で、やや小さな礫が、径１ｍ×1.3ｍの楕円形の範囲に、乱雑に散乱しているが、その区画は明瞭ではない。次のＳＸ34の左前方、南隅部分を壊しているようである。

礫の下には、1.2ｍ×1.05ｍの隅丸方形の土壙がある。深さ50cmで、壙底の脇を巡るようにやや小さな礫が方形に巡っている。遺物の出土は無い。

9　ＳＸ34

（1）形状

ＳＸ33に南東部分を壊された状態である。大小の礫が散在しているが、基本的には後方と両側に、やや大きな礫が巡る方形の礫群をもつ形態と思われる。前方部分は斜面で一部崩れている。現状は2.1ｍ×1.5ｍ。次のＳＸ35より新しいものと思われる。

礫下の土壙は、1.3ｍ×1.2ｍ、深さ70cmの方形でＳＸ32、ＳＸ33より一回り大きく深いものである。壙底には礫は無く、遺物の出土も無かった。

10　ＳＸ35

（1）形状

北側の崖上の墳墓である。南部分はＳＸ34に壊されているようである。中央部の礫群のみが残った状況で、北側の礫列も不明瞭である。後方の礫列は30cm×25cmの長方形の比較的大きな礫であるが、前方の礫は拳大程度である。

土壙は１ｍ×1.3ｍで、これまでの土壙と異なり東西方向に長く、僅か20cmと浅いものである。遺物の出土は無い。

Ⅸ　北方下段の土壙墓

ＳＸ35よりさらに東へ下がった所、標高75.5ｍ前後で、一辺６ｍ前後の方形の平坦な個所である。丘陵の北側の崖のすぐ上で、斜面下方に向かって口の開く低い逆凹状に巡る段状部分がある。北側の段部分は一部、崖によって崩れている。

1　ＳＸ36

（1）形状

段に囲まれた個所の中央部分は、盛り上がるように高くなっている。段のすぐ下には幅50cmで、段に並行して逆凹状に礫が配石されている。左奥の隅部分に五輪塔の空風輪が２個（74・75）、右側の崖の崩落部分の近くにも空風輪（76）が１個見られた。

この礫列の下には、幅60cm、深さ35cmの溝が巡り、溝内にも礫が埋まり、暗渠風に積み重ねられた状況である。

中央部分は、周囲より一段、20cmほど高く、1.5ｍ×１ｍの方形に、まわりの溝部分の礫と同じ礫が並べられている。礫は部分的に積み重ねられた状況である。礫を取り除くと下には一辺1.3ｍ、深さ70cmの、ほぼ正方形の土壙がある。土壙内には黒色土が埋まり、壙底には数個の礫があり、短刀（77）が南北方向に据えられていた。棺に副葬されていたものであろう。

（2）五輪塔（74～76）

空風輪（74）：高さ14.8cm、径11.7cm。柄の先端は欠失。空と風の境は溝状にならず、ゆるい段状となる。断面は楕円形を呈する。

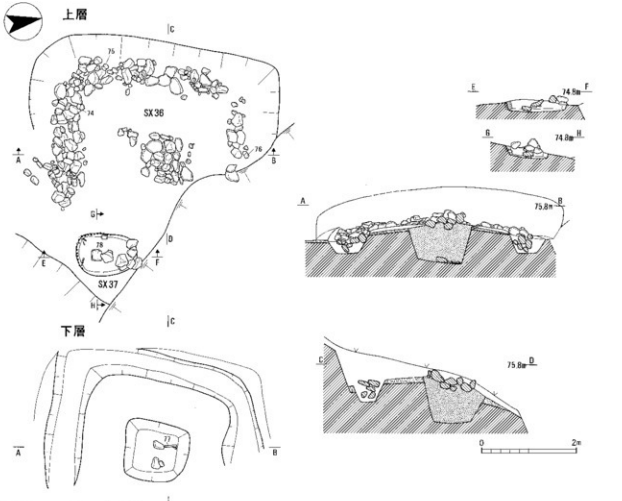
空風輪（75）：高さ16.3cm、径11.4cm。空輪と風輪境の溝が浅く、空輪は尖り気味になる。

空風輪（76）：現高19cm、径12.8cm。空と風を区分する溝は深く幅広である。

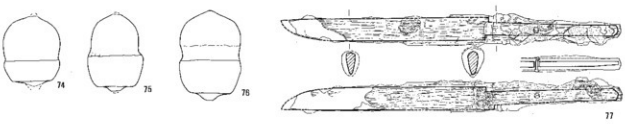
以上の空風輪は全て花崗岩製である。

（3）短刀（77）

全長34.7cm、刀身21.5cm。刃部には木質部が付着しており、鞘に入った状態で埋納されていたようである。鍔がつかない呑口式の拵えで、柄は木心漆地。刃部は中央部で幅2.6cm、厚さ１cmほど、茎は幅1.5～1.1cm、厚さ0.7cm。目釘穴は1個で径0.5cm。



第32図　ＳＸ36,37（1:80）



第33図　ＳＸ36出土遺物（鉄－1:4，石－1:8）

Ｘ　斜面下方の火葬跡

ＳＸ36のすぐ下方及び南側の斜面には、火葬したと思われる数個の土壙が確認されている。土壙の壁面が赤く焼け、壙内には灰混じりの黒褐色土が埋まり、礫の散乱も認められた。

1　ＳＸ37

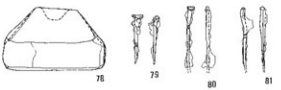
（1）形状

ＳＸ36の中央の土壙墓のすぐ左前、南東側に２ｍ程下がった個所に数個の礫が並んでいた。これらの礫の周囲を掘り下げると、1.1m×0.9m、深さ20cmの浅い方形の土壙があった。壙内にも数個の礫があり、土壙中央南寄りの個所には五輪塔の火輪（78）

が逆転した状態で見つかっている。土壙の内壁は、赤く固く焼けており、火葬した土壙と考えられる。火葬の後、礫で覆い五輪塔を据えたものであろうか。

（2）五輪塔（78）

火輪（78）：一辺21.5cm、高さ13.1cm。笠部はあまり明瞭な稜線ではなく、反りも弱い。空風輪をのせる枘穴は径５cm、深さ2.5cm。花崗岩。



第34図　ＳＸ37,39出土遺物（78：ＳＸ37,79～81：ＳＸ39）（鉄－1:4，石－1:8）

2　ＳＸ38・ＳＸ39・ＳＸ40・ＳＸ41

（1）形状

ＳＸ36の南側、標高74m前後のラインに沿った平坦地に、50個近くの礫の散布が認められた。一見、1.5m四方の区画を呈するようにも見える。その北側にも礫の散乱がある。方形の北側を区画するラインに五輪塔の空風輪が一点認められた。礫を取り除き掘り下げたところ、４基の火葬跡と思われる土壙が連続してあった。南側のＳＸ38は径1.2m×1.0m程の楕円形の土壙である。この土壙に切られる状態で次のＳＸ39が続く。ＳＸ39は地表に見られた礫群に伴うもので、幅1.0m、長さが1.5m以上と長く、深さは礫から40cm近くある。ＳＸ39の北側の礫群に伴うＳＸ40は幅1.1m、長さ1.65m、深さ30cmで最も新しい火葬跡である。さらに北へ同様の幅で３m近くやや屈曲しながらＳＸ41がその下層にある。いずれも土壙底部は灰混じりの黒褐色土が埋まり、ＳＸ41の北西隅部分の壁面が赤く焼成を受けているが、底面の赤色化は顕著ではない。ＳＸ40の土壙底部には十個程の礫が並んでいた。

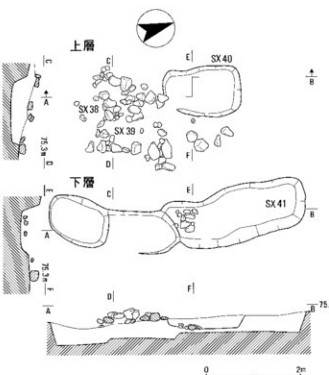
この４基の火葬土壙のうち、ＳＸ39のみが地表に礫が配置されたような状況で、空風輪も見られることから火葬の後を墓としたもので、ＳＸ38およびＳＸ40・ＳＸ41は火葬跡と思われる。ＳＸ39の土壙内からは棺に使用したと思われる鉄釘が３点（79～81）出土している。

（2）遺物（79～81）

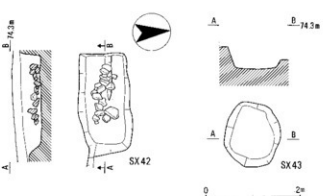
鉄釘（79～81）：いずれも2.5mm×3.5mmの角釘である。先端を叩いて折り曲げて釘頭としている。徐々に細くなり、釘先端を欠くが、７cm前後のものであったと思われる。

3　ＳＸ42・ＳＸ43

ＳＸ41の北東側に一段下がった個所、標高74.5m前後の平坦面を掘り下げたところ、２基の火葬跡を確認した。ＳＸ42は地表下15cmで確認した火葬跡である。2.5m×1.3m、深さ20～30cmの長方形を呈する土壙である。この土壙の長辺は丘陵斜面に直



第35図　ＳＸ38,39,40,41（1:80）



第36図　ＳＸ42,43（1:80）

交する。底部にやや大きめの礫が20個近く並んでいる。底面、壁面とも赤く焼けている。

ＳＸ43はＳＸ42の北２ｍの個所で、径1.3ｍ×1.1ｍ、深さ40㎝の楕円形を呈する。底面より10㎝程は灰混じりの黒色土である。

この２個の火葬跡から、五輪塔片も他の遺物も出土していない。

以上が発掘調査によって得た出土品資料である。発掘後の確認で礫の中に五輪塔の地輪と思われるものがいくつか確認されている。

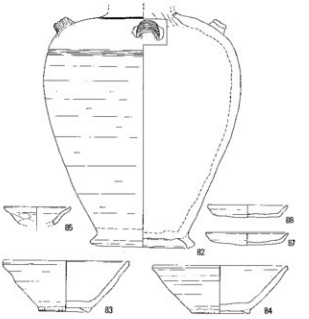
XI　その他遺物

発掘調査を実施する前に、丘陵の裾や段付近には五輪塔の各輪が散在していた。発掘調査時の排土からも土器片を採集している。また記録の記載の間違いにより出土個所を確定できないものもある。ここでそれらをまとめて記述することにした。

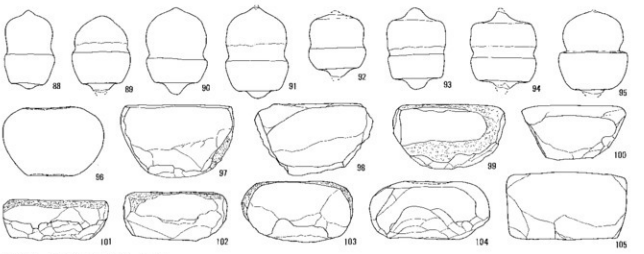
古瀬戸四耳壺（82）：現高25.0㎝、大きく張り出す肩部から胴部にかけて丸く膨らむ。頸部脇に５条の櫛描沈線が巡る。同様の櫛描沈線が肩部にも巡っている。２つ沈線の間には厚さ４㎜、幅17㎜、長さ３㎝の耳が４ヶ所に貼りつけられている。耳には４条のやや太い沈線が施されている。全体にロクロ仕上げによるナデが見られ、胴下半部は横方向のヘラケズリがなされる。高台は外に張り出すように貼り付けている。外面全体に濃緑の釉が施されている。胎土は緻密で、焼成は良い。

山茶椀（83）：口径13.3㎝、器高5.5㎝。中央部が僅かに膨らみ、底部に糸切痕が残る。内部底中央には一方向のナデがある。貼り付け高台で、籾殻痕が見られる。口縁部には自然釉が部分的にある。胎土に細砂を多く含む。

山茶椀（84）：口径14.2㎝、器高5.0㎝。83に比べ膨らみが小さく、器壁も厚手である。内部底のナデもない。底部の糸切痕は不明瞭である。高台には籾殻痕が残る。



第37図　その他出土遺物（1:4）



第38図　その他出土遺物（1:8）

土師器小皿（85）：口径７㎝の小さな皿。口唇部を僅かにつまみあげるように丸く仕上げる。内側にゆるい段状となる。胎土は緻密だが、細砂を含む。

土師器皿（86・87）：ほぼ同形の皿。口縁部が平らな底部から立ち上がる。口縁は平坦ではなく歪む。底部裏には板状圧痕が残る。淡い黄色を帯びた灰色を呈する。

五輪塔空風輪（88～95）：やや細長いもの、空と風の割合が微妙に異なるもの、頂部の平坦なもの、丸く尖るものとバラエティーに富む。

五輪塔水輪（96）：上下を僅かに窄ませ、全体を平滑に仕上げている。

五輪塔地輪（97～105）：105のみが全面を平滑に調整しているが、他は自然面を上端に利用し、他の面を粗く打ち欠いたままのもので、当遺跡の地輪によく見られるものである。

Ⅻ　結　語

経塚中世墓は、東面する丘陵に営まれた鎌倉時代の塚、墓、火葬跡からなる遺跡である。頂上部に経を埋めた塚を築き、そのすぐ下に、中心となる墓を、さらにその下方に丘陵の等高線に沿うように数段の墓域を形成して墓が営まれたようである。その数は既に破壊されたもの、発掘できなかったものを含め、50基以上にのぼると思われる。丘陵下部では火葬を行っていた。

中世墓は礫で覆われ土壙墓と蔵骨器、火葬墓からなる。発掘調査によって確認した土壙は22基を数え、蔵骨器は18個以上あったものと思われる（第２表）。その他に火葬墓が２基、火葬跡が５基である。

土壙と蔵骨器が重複することはない。ＳＸ５とＳＸ12の礫列に接して蔵骨器（24・36）が埋納されていたが、土壙と同時期ではないと考えている。

土壙に棺を埋葬して礫で覆う墓と、火葬骨を納入した壺を埋納して礫で覆う墓が同時期に築かれたものと思われる。それは蔵骨器の埋納がいずれも土壙墓を避けて埋納されていることから窺える。またＳＸ26～31の北部墳墓群とした個所では、南端のＳＸ26のみが土壙墓であり、この場所が蔵骨器を納める場所として占地されていたかのようである。

土壙墓には原則として、五輪塔が据えられたようである。22基の土壙墓のうち明らかに五輪塔を伴うものは６基のみであるが、表面採集された五輪塔の各輪は20個近くもあり、原位置を離れた五輪塔も多くあったであろう。

また、蔵骨器を埋納した個所に五輪塔を据えているものもある。五輪塔の形態に差異は認められず、このことからも土壙墓、蔵骨器の時期差は少ないと思われる。

これらの土壙墓、蔵骨器が混在するあり方は、磐田市一の谷中世墳墓群や、松阪市横尾中世墓群に似ているが、それらに比べ規模は小さい。

（１）塚について

丘陵頂部に営まれた塚は、この中世墓の先駆的な経塚と考えられる。明瞭に経塚と断言する資料に乏しいが、鎌倉期の遺物の出土より古墳とは考えがたく、伝承されるように経塚であり、盗掘によって主要な経塚遺物は既に無くなっていたものと思われる。中世墓に先立って経塚が営まれる例は、松阪市横尾中世墓においても述べられているところである。

しかし、この塚の主体部には通常の経塚に見られるような石組は認められず、経の埋納状況は全く不明である。小規模な経埋納施設が盗掘によって、既に無くなってしまったものであろうか。

（２）中世墓の築造場所について

一般的に中世墓は礫石で覆われる例が多い。礫石で蔵骨器を覆うもの、土壙墓を覆うもの、礫石に五輪塔を据えるもの、火葬した土壙を礫で覆い五輪塔を据えるもの等、比較的バラエティーに富む。

中世墓が営まれる立地は、先述したように、丘陵の尾根及び斜面と、丘陵裾や平地の集落内等で発見される例がある。

丘陵の中世墓は丘陵を段状に数段削平して、土壙を掘り棺を埋めて礫石で覆う。また配石の中に古瀬戸、常滑等の他地域で製作された、あたかも蔵骨器として入手したと考えられるものを埋納している。調査された鈴鹿市椎山中世墓、菰野町杉谷中世墓、大安町丹生川上城跡等である。椎山や杉谷では土葬

された土壙はなく、丹生川上城跡や当遺跡では蔵骨器埋納以前に土壙墓が存在する。

一方、集落内の中世墓は土壙墓が多く、副葬品には青磁椀、合子等の高級品かと思われるものや鏡、刀子等がある。火葬墓の蔵骨器は日常什器の土師器鍋や木製容器と思われる例があるが、古瀬戸や常滑焼といった例は少ないように見られる。また、丘陵の土壙墓から日常什器や青磁椀等を伴う例も少ないようである。

（3）中世墓の形態について

【土壙墓】基本的な形はＳＸ２・ＳＸ36であろう。まず丘陵の斜面を方形に削平する。崖下は浅い溝状に残す。中央部に棺を納める方形の土壙を掘る。棺を納入した後、この土壙を中心に３ｍ四方に礫を敷設するが、四辺にはやや大きな礫を並べ、その内部にはやや小さな礫を敷設する。土壙の中心に五輪塔を据える。土壙を中心にマウンド状となる。ＳＸ36は土壙と周囲の溝との間には礫が認められないが、後世に無くなったものと思われる。溝上の礫は重複しているために残存したものであろう。

下段のＳＸ２やＳＸ17、ＳＸ18においては、中心部の礫群とその後方の礫群の残存状況は逆凸形を呈しており、あるいはこの逆凸形に礫を敷設する形が基本となるとも考えたが、中心部の土壙上の方形部分の礫が厚く敷設されているようであり、残存がよく、その両側、前方部が無くなってしまったものと考えている。

【蔵骨器】礫群の中で発見される。その形態は明瞭ではないが、小石室状に礫を組んで埋納したと思われるＳＸ11は稀で、多くは礫群の中に穴を掘り、その中に納め、扁平な礫で覆っている。穴の底に礫を据える例（ＳＸ７）もある。蔵骨器の上に五輪塔を据えるもの（ＳＸ28）もある。

蔵骨器を中心とした礫群のまとまりは認められず、あたかも土壙を覆う礫群の中に後から蔵骨器を納める場所を決め、礫を取り除き穴を掘り蔵骨器を埋納して礫を元通りにもどしたのではないかと考えられる状況である。

【火葬墓】一の谷中世墳墓群では、丘陵上で荼毘をした遺構が多くみられるが、当遺跡では火葬を丘陵の裾部で行っている。土壙を穿ち遺体を火葬する。その際に棺の下に礫を据える場合もあったようである。火葬の後、そのままそこを墓とするため埋め戻し、さらに礫で覆い、五輪塔を据える。

土壙の壁、底面の焼土の状況からは、一つの土壙で複数体を火葬したとは考えがたい。

火葬跡とした遺構は、火葬拾骨した後は埋めるのみで墓として配石しないものとしたが、すべての礫が散逸したものであれば、墓であった可能性も否定できない。

（4）蔵骨器等の年代について

経塚中世墓から出土した土器は、古瀬戸、常滑焼、渥美窯製品等である。これらの土器の製作年代を見ると10世紀から15世紀に及ぶ（藤澤良祐　2001・1994）（中野晴久　1990）。

もちろんこの期間蔵骨器として使用されたものではないであろう。三筋壺や古瀬戸四耳壺や瓶子は蔵骨器に使用される例は多く見られるところであり、

	土壙	蔵骨器	五輪塔	副葬品・他
ＳＸ１	○			１～４
ＳＸ２	○		５～10	
ＳＸ３	○			11
ＳＸ４		12・13	15・16	14
ＳＸ５	○	24	26・27	17～23・25
ＳＸ６		28・29		
ＳＸ７		30		
ＳＸ８	○			31・32
ＳＸ９	○			
ＳＸ10	○			33
ＳＸ11		34・35		
ＳＸ12	○	36	37	
ＳＸ13	○			
ＳＸ14	○			
ＳＸ15	○			
ＳＸ16	○			
ＳＸ17	○			
ＳＸ18	○		38・39	
ＳＸ19			40	
ＳＸ20		41		
ＳＸ21	○			
ＳＸ22	○			
ＳＸ23		42		43
ＳＸ24	○			
ＳＸ25		44・45		
ＳＸ26	○		46～49	
ＳＸ27		50	51～56	
ＳＸ28		57～59	62	60・61
ＳＸ29			63～66	
ＳＸ30		67・68	69～71	
ＳＸ31			73	72
ＳＸ32	○			
ＳＸ33	○			
ＳＸ34	○			
ＳＸ35	○			
ＳＸ36	○		74～76	77
ＳＸ37	○		78	火葬墓
ＳＸ38	○			火葬跡
ＳＸ39	○		空風輪	79～81 火葬墓
ＳＸ40	○			火葬跡
ＳＸ41	○			火葬跡
ＳＸ42	○			火葬跡
ＳＸ43	○			火葬跡

第２表　中世墓一覧

伝世された品々を蔵骨器に転用したものと考えられる。一方、蔵骨器の蓋に使用された山茶椀は日常什器である。納骨時に蓋に使ったものであれば、山茶椀の年代が納骨時を表しているものとも考えられる。しかし、蔵骨器の本体を入手した際には、既に本体と蓋はセットであった可能性も否定できない。

例えばＳＸ６の蔵骨器（28）は14世紀中頃に、ＳＸ11の蔵骨器（35）は遡って13世紀前半頃に、ＳＸ27の蔵骨器（50）は15世紀前半に求められるようである。

想像をたくましくすれば、経塚中世墓は13世紀から15世紀にかけて営まれたものといえる。丘陵頂上の塚ＳＸ１から出土した常滑製甕や渥美製鉢も13世紀代と考えられ、塚築造後、時間を置かずにＳＸ２をはじめとして、中世墓が順次営まれていったものであろう。

ただ、蔵骨器埋納、土壙埋納、火葬墓等合せて50基に満たない墳墓が100年以上も存続するものであろうか。この墳墓を造営した集団は当地の集落の共同墓地、あるいは領主層の墓地とは考えがたい。中世墳墓の実態はまだまだ不明なことが多い。

（５）人骨について

中世墓から出土した蔵骨器には多くの人骨が納入されていた。人骨は三重大学医学部羽場喬一教授に鑑定していただいた。教授からは、これらの人骨は、火葬されたものと土葬されたものとが混在しているという結果をご教示いただいている。この結果は津市坂本山中世墓群の人骨の鑑定結果と同じである。羽場教授が鑑定された、丹生川上城跡の納骨施設とされる遺構から出土した複数体の人骨は全て火葬骨であり、鈴鹿市椎山中世墓では大部分が火葬骨だが、土葬の可能性を全く否定することはできないとされている。

この結果をどう解釈すべきであろう。丘陵裾で火葬した人骨を拾い、蔵骨器に入れる。この蔵骨器を丘陵中部の段状の石組に納入する際に、それ以前の土壙墓の人骨を合わせて納入したものであろうか。今回、検出した土壙は礫に覆われており、掘り返された状況は確認できず、この個所での土壙墓の人骨とは即断できない。

それとも他の個所で土葬された人骨を何らかの事情で拾骨し、ここで火葬骨とあわせて納骨したものであろうか。土葬された遺体は再度掘り返され蔵骨器に納入されるという再葬を行っているのである。当時の複雑な納骨風習の一端を示すものである。

（６）被葬者と葬法

最近の中世墓の報告や論文をみると、平安時代から鎌倉時代にかけての死者の処理の多くは遺棄風葬であるという。さらに葬儀は土葬であれ、火葬であれ、穢れを恐れ血縁者のみで執り行っていたという。

しかし、これまで風葬であった葬法が仏教の布教に伴って往生を願う人々が縁を結び、葬儀を執り行うようになる。

近親者の葬儀を行うにしても、棺を用意でき、葬儀に伴う埋葬、火葬を執り行う費用を賄うことのできる富裕層に限られる。13世紀、土豪藤原実重が杉谷や多度の堂に寄進をしたり、写経といった作善を行っている。実重のような土豪がある種の縁を結び、この大安の地で葬送を執り行ったのであろうか。

経塚中世墓に葬られた人々は、共同墓地であるにしても、集落の墓地ではなく、ある種の縁につながる集団であったものと思われる。それには、頂上に塚を築いた人、集団が中心となる関わりがあったのかもしれない。

土葬か火葬かその選択は何であったのであろうか。被葬者の相違か、宗派の違いといった宗教的な意味合いがあったのであろうか。古記録には親の葬法と異なる葬法を遺言している例が多く見られ、死者をどの葬法で埋葬するかは、ある集団の規制で縛られることなく、被葬者が各々自由に選択し得たものと思われる。

【参考文献】

・大安町教育委員会　1986　『大安町史第１巻』　大安町
・岩野見司　1956　『考古学から見た北伊勢』　三岐鉄道
・三重県埋蔵文化財センター　2002　『一般国道475号東海環状自動車道　権現坂遺跡発掘調査報告』
・藤澤良祐　1994　「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要第３号』　三重県埋蔵文化財センター
・藤澤良祐　2001　「埋納された古瀬戸製品」『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要Ⅹ㈵』　瀬戸市歴史民俗資料館
・中野晴久　1990　「三筋壺・その造形と意味をめぐって」『常滑市民俗資料館　研究紀要Ⅳ』　常滑市教育委員会

経塚中世墓遠景（東から）

経塚中世墓遠景（南東から）

ＳＸ１

ＳＸ１　主体部（北西から）

ＳＸ２（南東から）

ＳＸ２（東から）

ＳＸ３（北西から）

ＳＸ４（南東から）

写真図版２

ＳＸ５・ＳＸ６（西から）

ＳＸ９・ＳＸ10・ＳＸ11・ＳＸ12（北から）

ＳＸ12（東から）

ＳＸ13（西から）

ＳＸ17・ＳＸ18（北から）

ＳＸ17・ＳＸ18（北から）

ＳＸ20（南から）

ＳＸ24（南東から）

ＳＸ25遺物出土状況

ＳＸ28（東から）

ＳＸ29・ＳＸ30・ＳＸ31（西から）

ＳＸ32・ＳＸ33・ＳＸ34・ＳＸ35（南から）

ＳＸ36・ＳＸ37（北西から）

ＳＸ36（南東から）

ＳＸ38・ＳＸ39・ＳＸ40・ＳＸ41（南から）

ＳＸ42（南から）

写真図版４

5～8

46～49

9

10

15

16

26

27

37

38

39

51

52

53

54

55

56

62

63

64

写真図版６

66

70

71

73

74

75

76

78

88

89

90

91

92

93

94

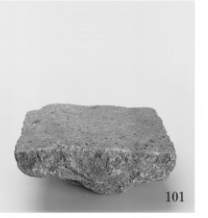
95

96

97

98

99


101

102

104

105

写真図版８

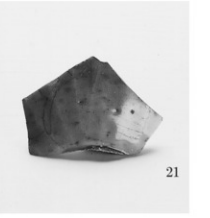
3

12

13

17

19 20


21

22

23

24

28−1

28−2

29

30

31

32　60

34－1

35－1

36

34－2

35－2

41

42－1

42－2

44

写真図版10

45

50

57

58

59

67

68

72

82

83

84

87 86

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きょうづかちゅうせいぼはっくつちょうさほうこく
書　　名	経塚中世墓発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	研究紀要
シリーズ番号	１９－２
編 著 者 名	谷本鋭次
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　　TEL 0596-52-1732
発 行 年 月 日	２０１０（平成２２）年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きょうづかちゅうせいぼ 経塚中世墓	みえけんいなべしおおやすちょういしがわしもあざきょうづか 三重県いなべ市大安町石榑下字経塚	24323	214C108	35° 06′ 26″	136° 32′ 03″	1973年４月～７月	約400	北伊勢地区広域営農団地基幹農道事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
経塚中世墓	中世墓	中世	土壙、火葬墓、火葬跡	陶器（古瀬戸・常滑）、土師器（皿）、五輪塔、刀子	

要約	中世墓を43基検出。内、火葬跡５基、火葬墓２基。

経塚中世墓発掘調査報告

研究紀要第19－２号

２０１０（平成22）年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　光出版印刷株式会社